

第三章 道教における元帥神

1. 雷法の発展

『道法会元』¹⁾は、『道蔵』の中でも屈指の大部の儀礼書であり、清微や神霄など、雷法を中心とした諸派の道法、すなわち法術を集大成したものである。ただ、集大成だけあって、その内容はかなり雑多である。系統で言えば、清微・神霄・天心・酆都など、かなり性格の異なる法術が一緒になってしまっている。こういった法術は、「神霄雷法」や「五雷法」をもってその代表とすることも多いが、ひとまず総称して「雷法」運動として考えることにする。また本章では、ある流派の道士や法師が駆使する術を「法術」とする。これらの法術は「何々法」と称されることが多く、また「呪法」「道術」「方術」とも呼ばれる。

さて北宋代に興起し、その後徽宗の庇護のもと、大きく発展した雷法については、すでに多くの研究者による考察がある。例えば松本浩一氏は次のように述べる²⁾。

こうした新しい伝統の発生という一連の現象の中に位置づけられるものに、古来の伝統の中には見られなかったいくつかの特徴的な呪法の登場がある。『道法会元』等の呪法の書に説かれている。雷法、天心法、酆都法などと呼ばれるこれらの呪法は、その多くが唐末五代にその起源をもつとされているが、この時代になって、民間で活躍していた宗教者たちの間で発達を見ることになった。それが北宋末徽宗の崇道と林靈素の活躍とによって歴史の舞台に登場することになり、全中国的規模で冥界のヒエラルキーが確立されていく動きに対応した道教教団の動きもあって、教団、特に正一教団の手によって正式に採用されるに至ったのである。そしてこの教団による正式採用の過程において、雷法と呼ばれる、雷の力を呪術力の源泉と

し、雷呪によって雷部の神将・神兵を使役して驅邪等を行う呪法が、特に精緻な理論づけや依拠の經典を与えられて、道教の呪法中重要なものに数えられるようになった。

また劉枝萬氏は、雷法について、それが道教に本来あったものではなく、あくまで民間の巫者たちの法術が源流になったものだと指摘し、次のように述べる³⁾。

要するに雷法は、林靈素の出現によって整理集成され、画期的発展期を迎えたのであるが、煎じ詰めれば、雷法は彼にとって、栄達への踏台になったが、逆にそれなるがゆえに、今まで地下潜行の隠微な妖術の補助法が、一躍して地上における、公然たる正法への輝かしい脱皮をとげたと称しても、恐らく過言ではなかろう。『道法会元』は、『上清靈宝大法』と共に、宋代に集大成された呪法儀礼書の双璧として有名である。後者は編者を異にする両書を合計しても一一〇巻だが、前者は全書二六八巻にも及ぶ浩瀚なものである。しかしてその内容は、ほとんどが雷法が核心になっている観があり、含まれている種類はおびただしい。

ただ、北宋における徽宗の並外れた崇道に強く関わり、北宋の亡国の一因を担った者として、林靈素の評判は芳しくない。そのためか、雷法は南宋期において、金允中のような正統派を任ずる道士たちから厳しく非難されている。そのことについて、ミシェール・ストリックマン氏は次のように言う⁴⁾。

上清靈宝大法の著者である金允中にとって、神霄運動は許しがたいほどに異端であり、真の道教の啓示という土台を全く欠いているものであった。「正」でないものは何であろうと必然的に「邪」に違いなく、一旦正統派道教の慣習の輪からはみ出したとして規定されると、神霄の祭司たちは正統派道士から現実として本質的に悪魔的

であると見なされた。

しかしながら、林靈素個人への批判はさておき、南宋以後も多くの有力な道士が雷法を受け入れ、発展させていったのは確かである。そして最後には、龍虎山の正一派自身が雷法を受け入れることになった。ストリックマン氏は、白玉蟾と雷法の密接な関係について論じた後、次のように述べる⁵⁾。

正統派という問題は、宋代に道教徒の集団の中でますます強く前面に押し出されてきた。この問題への関心の高まりは、再び姿を現した正一派が公的な援助を得、他のすべての道教教団の上にその正統性を確立しよう、という試みと関係がある。正一派の中に五雷法が出てきたのは、神霄の有害な儀式、それは悪魔的雰囲気漂うものと見られていたが、それに対抗するためであった。これが、林靈素の雷呪への天師の反応であった。正一派では、五雷法は初代の天師張道陵にまで遡ると主張するけれども、それが実際は神霄運動という挑戦を受けたために出てきたものであることは明らかである。特徴的なことであるが、神霄派への対抗のために、天師は敵自らの武器を使った、すなわち、雷に対して雷で戦ったのである。

また『中国道教史』の第八章六節「南宋の三山符籙道派の流伝：内丹派南宗と浄明道の形成：東華・神霄・天心正法・清微等新符籙派別の興起」⁶⁾では、南宋から元にかけて、多くの優れた道士が雷法を修得し、普及させていった結果、雷法が隆盛になっていく状況について詳しく述べられている。恐らく元代には、雷法はすでに道教の正統な法術と認識されていたと考えられる。

さて雷法の系譜について述べた『道門十規』⁷⁾には、次のような記載がある。

神霄の法は、汪・王の二祖師から始まり、張・李・白・薩・潘・楊・唐・莫などの諸師に伝わり、発展したのである。

ここでは、汪守貞・王文卿の二人の祖師を強調し、あまり林靈素についてはふれず、神霄を継ぐ者としては張繼先・白玉蟾・薩守堅・莫月鼎を挙げている。もちろん、後世雷法の祖師として尊崇されるのも、これらの道士たちである。

ただ、正一派における雷法の受け入れは、ストリックマン氏の指摘よりも、若干早い時期を想定してもよいと思われる。例えば、徽宗朝において有名な第三十代張天師である張繼先は、『明真破妄章頌』⁸⁾において、次のような言葉を残している。

すべての法は一処に帰すものだ。正一だとか清微だとか殊更に分ける必要があるのか。⁹⁾

張繼先は、崇寧四年（一一〇五）に徽宗に召され、「虚靖先生」の号を賜ったとされている。ただ、恐らくは徽宗の信任は林靈素に遠く及ばず、「張天師」それ自体の地位も元の時代に比べればそれほど高いものではなかった。南宋期には留用光のように、正一派においても五雷法で著名になった者も現れている。張繼先は歴代張天師の中でも、やや特殊な地位にあるのは間違いないが¹⁰⁾、それにしても雷法に対して、早くから融合的な志向を持っていたものと思われる。

その後の神霄派の発展においては、王文卿と薩守堅の役割が重要である。『道法会元』卷六十七に収録される二種の『雷説』は、雷法の理論面を支える重要な文章である。さらに著名な道士白玉蟾も雷法を兼修し、『玄珠歌注』において内丹説と雷法との融合を図っている。

雷法は元代には莫月鼎に引き継がれて発展し、明代においては、世宗嘉靖帝の崇道に大きな影響を与えた陶仲文によって雷法が広まった。

明代の通俗小説において、雷法がしばしば「正統な法術」として扱われるのは、主にこのような元明における風潮を受けてのことであろう。例えば『水滸伝』では、梁山泊の豪傑の一人で、道士である公孫勝に対し、その師の羅真人が次のように告げる¹¹⁾。

羅真人は言った。

「弟子よ、そなたがいままで習ってきた法術は高廉の使うものとう変わりはせぬ。いまわしはそなたに五雷天心正法を伝授しよう。この法術を行い、宋江を助け、国を守り民を安んじ、天に替わって道を行おうのじゃ。」¹²⁾

この他、『警世通言』や『平妖伝』などにも、「五雷天心正法」を使う道士が登場し、その正統性を幾度となく強調する記載がある。この時期においては、雷法は完全に道教の正統な法術とみなされるようになっている。

清代においては、雷法はそれほど注目を集めなくなったようであるが、正一派の本拠地である龍虎山と、蘇州玄妙觀などでは、引き続き雷法が行われたようである¹³⁾。また道教や民間信仰の儀礼の中に、数多くの元帥神が登場することからも分かるように、雷法は各種の儀礼に影響を与えている。

2. 神霄派の雷霆神

ところで、林靈素の時期に、神霄派などにおいて元帥神が重視されていたかという点、これについては疑問な点も多い。例えば、『無上九霄玉清大梵紫微玄都雷霆玉經』¹⁴⁾は、北宋末の神霄雷法に関する重要な經典であるとされるが、そこに見える雷霆神は、後の元帥神とはかなり異なるものである。

東方雷霆風雨雲電之神	呼風巫	咄遮黎	义鳩羅
南方雷霆風雨雲電之神	氷鳩鷗	煖炎寮	石阿雄
西方雷霆風雨雲電之神	榮耀靈	朗重延	閃鳩陀
北方雷霆風雨雲電之神	盧刑猛	橫天霸	釗振鳩
中央雷霆風雨雲電之神	孫真耳	多伯言	旭執圭

さらに、この經典の後半部、各神の職種を記したところにも、「紫微大帝・天蓬君・天猷君・翊聖真君・玄武君・天罡神・河魁神・火鈴大將軍・天丁力

士・六丁玉女・六甲將軍」などの名称は見えるものの、元帥神につながるようなものは少ない。

北極紫微大帝は三界を統括し、五雷を掌握する。天蓬君・天猷君・翊聖君・玄武君は分司領治とする。天罡神・河魁神は召雷檄霆の司となす。九天流金火鈴大將軍・天丁力士・六丁玉女・六甲將軍は、節度雷霆の使とする。九天嘯命風雷使者・雷令使者・火令大仙火伯・風令火令風伯・四目皓翁・蒼牙霹靂大仙は撰轄雷霆の神とする。火伯風霆君・風火元明君・雷光元聖君・雨師丈人仙君は雷霆風雨の主とする。中に三五邵陽雷公火車鉄面の神あり、また中に負風猛吏銀牙耀目欵火律令大神あり。狼牙猛吏大判官・五雷飛捷使者・五方雷公將軍・八方雲雷大將・五方蛮雷使者・三界蛮雷使者・九社蛮雷使者、実にその命令を司り、その権を用いよ。¹⁵⁾

また『高上神霄玉清真王紫書大法』¹⁶⁾は、全十二巻のうち、前三巻が北宋末の成立と言われている¹⁷⁾。例えばその巻六の「大將軍部」に見える神將の人員は次の通りである。

総監大將軍	王文宣	統兵大將軍	丁仲珪	主水大將軍	王藩
主火大將軍	趙仲明	主風大將軍	馮浩	主雲大將軍	童隆
主炁大將軍	瞿德	主雨大將軍	丁宗成	主殺大將軍	蔣徳交
主生大將軍	劉通	主病大將軍	丁宗巖	捉鬼大將軍	馬勝
縛邪大將軍	陳猛	考鬼大將軍	莊徳降	破廟大將軍	趙侯
伏魔大將軍	元真	縛龍大將軍	応宿元	搜奸大將軍	丁友忠

(後略)

この他にも巻七においては「捉邪靈官部」があり、そこにも多くの靈官の名が見えるが、ほとんどが後の元帥神とは異なるものである。かろうじて馬元帥(馬勝)と劉天君(劉通)の名は一致するが、これは同名異神である可能

性もある。趙仲明は趙公明を指すか。

恐らく後に付加されたと思われる巻九の「玉府聖位」においては、「玉府上卿五雷使・陶伯成」に始まる多くの仙卿・靈官の名を掲げる。数百にのぼる神々の名が挙げられているが、ここで後の元帥とおぼしき名称を持つ神は、「欵火大神・鄧伯温」、すなわち鄧天君くらいである。

この他、この『高上神霄玉清真王紫書大法』には、密教の陀羅尼に似せた呪文があまり見えない点も重要である。但し、巻九の「神霄玉清王府三十六天嶽神符」においては、ほとんどの密呪は陀羅尼系のようにである。

また同様の傾向は『道法会元』巻五十六「上清玉府五雷大法玉枢靈文」また、巻五十七から巻六十までの「上清玉枢五雷真文」においても見られる。すなわち『道法会元』の中でも、神霄系の呪法には、『三教搜神大全』に見られるような、温・関・馬・趙といった元帥が出てくることは少ない。

但し、巻六十一「高上神霄玉枢斬勘五雷大法」においては、王文卿の序を引き、なおかつ将帥として、「鄧伯温・辛漢臣・張元伯」すなわち鄧・辛・張の三天君が中心になっている。王文卿の頃では、一応この三天君を雷部の中心とする法術が行われていた可能性が高い。

また他に、古い神霄派の経典と考えられるものとしては、『九天応元雷声普化天尊玉枢宝経』¹⁸⁾ や『太上説朝天謝雷真経』¹⁹⁾ などがあるが、このどちらにも、後の元帥神らしき名称が見えない。やはり中心になるのは、普化天尊とその部下の雷霆神たちである。

これらのことから、『三教搜神大全』や『封神演義』などに見える元帥神の多くは、北宋期の神霄派においては、あまり重視されていなかったのではないかと推察されるのである。

3. 北極四聖について

事実、この時期における駆邪の武神として重視されていたのは、天蓬・天猷・真武・翊聖真君からなる北極四聖、及びその配下の天罡大聖や六甲六丁神などであった。先に見た『無上九霄玉清大梵紫微玄都雷霆玉経』においても、北極紫微大帝を主とし、その下に北極四聖、さらにその下に六甲六丁神

を配している。

これらの神々と、神霄派の関係について、李遠国氏は「鄧紫陽と北帝大法」²⁰⁾において、次のように述べる。

北帝派は初唐の道士鄧紫陽が開創したものである。北極紫微大帝すなわち北帝を尊崇する派である。「北帝録」などの経録を受け、「酆都」の六天の鬼神を退治するという術に長けており、また辟邪や禍を祓う術で著名であった。(略) これらは、この「北帝大法」が唐代に隆盛であったことの証左である。(略) その後、唐末五代の杜光庭、宋代の張繼先・王宗敬・呉道顕・柳伯奇・鍾明真・盧養浩・徐必大・劉玉・黄公瑾などは、みな「北帝大法」を修得しており、また、それと「神霄雷法」を結合していたのである。この流れから、新しい一つの道法が現れた。それは「神霄金火天丁大法」である。

すなわち、唐代にあった北帝派の流れが、宋代には神霄派と結合して発展したという。

実際には、北帝を驅邪神とする信仰は、早期の道教にすでに見られる。『真誥』²¹⁾の中にある「北帝煞鬼之法」がそれで、北帝派はこの流れに沿って発展したものであろう。

世の人、酆都に六天宮門の名があることを知れば、すなわち百鬼はあえて害をなすことはない。眠ろうとするとき、常にまず北を向き、呪を三たび唱えよ。その音は微ならしめよ。その呪文とは、「われは太上の弟子なり。下は六天を統ず。六天の宮は、われに部するものである。ただ部するものでなければ、太上が司るところである。われは六天の門の名を知る。このゆえに長生を得ている。あえて犯すものがあれば、太上はそなたたちを斬に処するであろう(略)」とある。

これがいわゆる北帝の神呪、煞鬼の良法である。鬼が三たびこの法

を受ければ、みな自ら死んでしまう。²²⁾

また「天蓬呪」も驅邪の法として古くから用いられるものである。ただ、この北帝を北極紫微大帝とし、下に四聖を配して驅邪の府、すなわち「北極驅邪院」を構成するのは、やはり北宋以後になってからのことであると考えられる。特に、四聖のうち翊聖真君と真武は、唐末五代から興起したものであり、道教に取り入れられた時期は、紫微大帝や天蓬神よりもずっと遅いものと推察される。もっとも、「北帝」が明確に「紫微大帝」と意識され、「天蓬神」が「天蓬元帥」として認識されるのは、若干後になってからのことである。先に見た『雲笈七籤』の記事で、天蓬神が「大元帥」と呼ばれるのは、むしろこのことを反映しているものである。もっとも『道法会元』を見るに、北極驅邪院の神格は、あまり明確にはされていない場合も多い。驅邪院を含め、天枢院などの性格も、法術によって様々である。ここで示す驅邪院の構成も、あくまで一部の法術にしか当て嵌まらないものである。

さて劉枝萬氏によれば、天蓬神については、神自体に関する信仰と、「天蓬呪」などに関する信仰との乖離が目立つという²³⁾。

要するに天蓬神信仰は、神自身の影が薄くて、むしろその呪文と法器が重視され、換言すれば天蓬元帥をさしおいて、天蓬呪と天蓬尺が一人歩きをしているという、信仰形態面における特異性が注目を引くのである。

南宋から元にかけては、恐らく天蓬元帥の信仰はそれなりの勢力があったと推察される。しかし、明代の小説などでも天蓬元帥は一部の『水滸伝』や『西遊記』を除けば、それほど目立った存在ではない。さらに『西遊記』では、猪八戒が天蓬元帥の化身とされているため、ますますそのイメージがねじ曲げられてしまった。『三教搜神大全』に天蓬元帥の独立の項目が無いのは、この時期の天蓬元帥の民間における地位の低下を反映したものとしてよいであろう。

また四聖のうち、翊聖真君については、北宋の始め道士張守清がこの神の神託を受けて、王室に働きかけたことがその信仰が隆盛になったきっかけであった。これにも劉枝萬氏の指摘があって言う²⁴⁾。

黒煞神の起源は不詳だが、早くから五代の道士譚紫霄に黒煞神君として信奉され、北宋では開宝九年(九七六)、「天の尊神、玉帝の輔」だと自称する黒殺大將軍が、宋朝を衛護するために張守真に降下して、帝室に取り入り、崇信された史実は有名である。その出自は巫覡の守護神だと考えられるが、称号に「黒」の字を冠しているとおり、五行に配した北方の辟邪神なるがゆえに、同じく民間信仰より萌芽した北天の辟邪神たる天蓬と結合しやすかったのであろう。

黒煞神については、その性格が曖昧であるためか、後世他の神との混同を招きやすい面もあった。まず四聖のうち真武との混同がある。また、趙玄壇、すなわち趙公明(趙元帥)と同一視されることもあった。さらに、趙玄壇が趙氏の始祖神である保生天尊・趙玄朗と名称が酷似しているため、それとの混淆もあった。ただ、その性格からして、やはり五代の巫覡の守護神が道教の中に流入したものと言えよう。エドワード・デイビス氏は、この黒煞神の信仰の道教への流入を非常に重視している²⁵⁾。

さて四聖の真武は、後世「玄天上帝」として非常に重視された神である。それが古来四獣として信仰のあった玄武であり、亀と蛇で現されるものが、唐末五代の時期から徐々に人格神に変容したものであることは、拙論でも詳しく論じた²⁶⁾。王光徳・楊立志両氏は玄武について次のように述べる²⁷⁾。

玄武は、元は青龍・朱雀・白虎・玄武の四象崇拝の一つであったものが、後に道教の神系に加えられたものである。玄武は四方の守護神の中で北方守護をその任とした。(略)後、北方星神である北宮玄武は、五代の前には北極紫微大帝の神系に属するとみなされるようになった。そして徐々に四象崇拝を脱し、紫微大帝の四大神將の

一つとなった。(略)玄武は道教の神系において地位を向上させていったが、これは中天北極紫微大帝の信仰と密接な関係がある。(略)恐らく六朝時代には北極大帝、略して北帝という神格が成り立っていた。また唐代の道教には北帝派という派が存在していた。(略)北帝の四将とは、すなわち天蓬・天猷・黒煞・玄武の四将である。このように宋代以降は専ら四聖と称するようになった。この時点での「將軍」という職は天帝の侍従に対する称呼であり、神格の地位は決して高くはない。時間の推移とともに玄武は四象の系統を脱し、星神から転化して具体的な人格を有する神となった。そして後には北極崇拜と融合し、道教の「大神」となる基礎を築き上げたのである。

このように、紫微大帝の配下の將軍であった真武は、北宋より後その位階を上げ、元代以降は「玄天上帝」と称されることになった。むしろ、真武のみを尊崇することは、徐々に行われていったようである。唐代劍氏の指摘によれば、南宋の孝宗・理宗より、四聖の中でも特に真武を崇拜する傾向が強まるとされる²⁸⁾。その後、玄天上帝となった真武は、むしろ北帝の役割を紫微大帝、或いは酆都北陰大帝に代わって受け持つことになる。拙論で論じたように、『元始天尊説北方真武妙経』²⁹⁾が、『太上元始天尊説北帝伏魔神呪妙経』³⁰⁾を模して作られたのも、北帝の役割が真武に受け継がれたために発生した現象であると考えられる。明代には、特に永楽帝の尊崇が甚だしく、玄天上帝の聖地である湖北の武当山においては、膨大な国費を投入しての宮觀の造築が行われた。今にも残る武当山の建築群の大半は、このときに作られたものである。

さて『三教搜神大全』が基づいた『搜神広記』の前集においては、玉皇上帝や聖祖・東華帝君・西王母などに続き、玄天上帝の記事が載せられている。このことから、すでに玄天上帝の地位は、これらの神に次ぐものとみなされていることが分かる。一方で、紫微大帝や北極四聖に関する記事は、特に独立の項目を立てられていない。すなわち、『搜神広記』の書かれた元代にお

いては、完全に玄天上帝こそが、かつての北帝神、すなわち驅邪院の主たる神格と考えられるようになっていのである。

これを端的に示すのが、雑劇『二郎神鎖齊天大聖』である。第四折に登場する驅邪院主は、次のように述べる³¹⁾。

驅邪院主は言う。

「(略) 父は浄楽国王、母は善勝夫人。胎内にあること十四ヶ月、すなわち太上老君の八十二番目の変化、母の左脇から生じた。(略) 玉帝は貧道の功績あるを称え、勅して九天採訪遊奕使・北極鎮天真武玉虚師相玄天元聖仁威上帝に封じ、北極驅邪院都教主とした。」³²⁾

ここでは北極驅邪院主は、紫微大帝や或いは酆都北陰大帝ではなく、完全に玄天上帝であることになっている。

そして、このような民間における玄天上帝の地位の変化は、他の神格にも波及することになった。まず、北極紫微大帝の地位は、玉帝などと並んでやや形式的な上位神へと追いやられ、甚だ存在感を欠くものとなった。また、真武以外の四聖、すなわち天蓬・天猷・翊聖真君が真武に比しては目立たぬ神格となる。『三教搜神大全』に天蓬・天猷元帥の独立の項目が立てられていないのも、このような玄天上帝の地位向上に伴っての現象と思われる。また同時に、玄天上帝は紫微大帝のみならず、天蓬神が持っていた役割を担うことにもなった。

そもそも、三十六員の天将を配下に持つ、という特色も元来は天蓬元帥、或いは天罡大聖のものであった。すなわち『道法会元』卷一五六「上清天蓬伏魔大法」に言う。

祖師の九天尚父・五方都総管・北極左垣上将都統大元帥・天蓬真君は、姓を下、名を莊という。三頭六手にして、手に斧・索・弓箭・劍・戟の六種の武器を執る。黒衣玄冠にして、三十万の兵を率いる。

北斗の破軍星の化身であり、また金眉老君の後身である。(略)
三十万の兵と、三十六の天将を率いる。³³⁾

むしろこのような考え方も、数多くの派がある道教や民間信仰においては、地域差もあり、必ずしも統一されていたわけでない。先にも少し言及したが、道教の神系は、甚だしい時は、ある經典ごとに、いや特定の經典の内部ですら異なる場合がある。

ただ極めて大雑把に、宋から明にかけての北極驅邪院の性格を見るならば、元来は北極紫微大帝の配下に四聖があり、その下にまた三十六の天将がいるという構成が、後に驅邪院主・玄天上帝の下に三十六の元帥が配される、という考え方に变化する。『北遊記』など、明代の小説に見える三十六の元帥神は、恐らくこのような考え方に基づいて構成されているものと考えられる。但し、元帥神の主神は、時には雷声普化天尊とみなされることもあった。『封神演義』などでの考え方は、これに近いものである。

『三教搜神大全』における元帥神の記事の多くは、恐らくは、この「玄天上帝と配下の三十六元帥」という考え方に基づいているものと考えられる。例えば、「靈官馬元帥」の記事には「勅により玄天上帝の部下となり」³⁴⁾という記述があり、さらに「鉄元帥」の項目にも、「玄天上帝が悪気を治めた時に協力した」³⁵⁾という記載がある。

但し、『道法会元』中には、この両者の考え方が併存している。これは『道法会元』が諸法の集大成であることを考慮すれば、当然ありうることである。むしろ『道法会元』は、そもそも様々な方術が雑多に集められており、幾つもの神体系が混在しているものであり、厳密な定義は難しいということを考慮する必要はある。

さて、『道法会元』中には、明確に紫微大帝を主とする幾つかの法術がある。すなわち巻一五六から一六八の「上清天蓬伏魔大法」、巻百六十九から巻百七十までの「混元飛捉四聖伏魔大法」においては、北極紫微大帝を中心とし、四聖や、天罡大聖などの三十六天将が驅邪の役割を担っている。また、これとはいささか性格が異なるが、巻二百十一の「天罡生煞大法」及び

「中皇総制飛星活曜天罡大法運用秘訣」では天罡大聖が主となり、卷二百十三の「広靈宣化陳將軍秘法」などでは、紫微大帝が法の中心となる。卷二百十七の「紫庭追伐補斷大法」では天蓬元帥を「北極法主天蓬都元帥蒼天上帝」として首座に据える。

そして、同時に卷百三十の「北真水部火飛擊雷大法」では、玄天上帝を主法とする。これは水部を中心とした法なので、いささか系統が異なっているが、卷二百二十七の「太一火犀雷府朱將軍考附大法」では、玉帝・紫微大帝を主法に据えるものの、「法主」となっているのは「玉虛師相玄天上帝」である。

総じて『道法会元』においては、紫微大帝と北極四聖を中心とする法術の体系が中心となっているものの、玄天上帝を主とする法術も多く混入していると考えられる。

4. 天心法と浄明道系統の法術

紫微大帝と四聖を中心とする北極驅邪院を重視する姿勢は、神霄雷法よりも、天心法において、より顕著である。

もっとも天心法は、先に見た『水滸伝』のように、後には「五雷天心法」と称せられることも多く、神霄の雷法と結合して、雷法の代表的な法術とみなされるものである。このため、両者にはかなりの共通点があり、神系においてもそれが現れているものと考えられる。もっとも、神霄雷法と天心法では、神霄法が雷を重視するのに対し、天心法は光を重視するなどの性格の違いがある。

さて、天心法は五代の譚紫霄を祖師とするのが常であるが、松本浩一氏の指摘によれば、馬令『南唐書』の譚紫霄の伝には、特に天心法についての記載は見えず、その後陸游の『南唐書』においてそれが現れてくることである³⁶⁾。恐らく譚紫霄が天心法の祖だということ自体、後から考えられたものであろう。その後天心法は、饒洞天がこれを受け継ぎ、華蓋山に登って大いにその法術を顕したという。華蓋山における信仰については、ロバート・ハイムズ氏がこれを重視しているが、その影響については今ひとつ不明確な

点が多い³⁷⁾。その後、両宋期の著名な道士路時中が、「天心正法」を行ったことが知られている。ただ、実際の天心法の伝授については不明な点が多いと言わざるを得ない。

天心法の經典として知られているのは、『太上助国救民総真秘要』³⁸⁾『上清天心正法』³⁹⁾『上清北極天心正法』⁴⁰⁾『無上玄元三天玉堂大法』⁴¹⁾などがある。

『太上助国救民総真秘要』は、政和六年（一一一六）の元妙宗の自序があり、宋代の成書であることが分かる⁴²⁾。その巻二などに見える神は、三清や玉帝や張天師などの名も見えているが、やはり中心になるのは、北極紫微大帝・天蓬・天猷・真武・黒殺・天剛大聖（天罡大聖）と三十六将などの神々である。さらに六甲六丁神と唐・葛・周の三將軍などが見える。総じて、道教の伝統に則った神が多い。また『太上助国救民総真秘要』には、陀羅尼系の呪文的な呪文が総じて少ないのであるが、巻五の「五嶽符」には幾つかそれが見える。また「軍吒利」が土星神の諱であるとされている。巻六の記載には、次のようにある。

上帝が天枢院に奏上し、四天王・十二大神・八金剛・六丁六甲・天蓬・天猷・火鈴大將軍・五雷風雨の神をして、天門より出さしむ。⁴³⁾

巻七には、神将の名が具体的に挙げられている。

捉将 崔舒宣
 縛将 盧機権
 枷将 竇楊捶・楊光
 黄頭将 陳鎮
 蓬頭将 劉仲
 牢頭将 楊政
 五方追鬼将 趙公明

左右急捉将 姚端
 火輪将 宋無忌
 考鬼将 鄧行文
 斬頭瀝血将 劉炎
 藥叉将 陳守忠
 靈官五郎 馬勝

その役職名から推察するに、これらの神は、治獄を担当するかなり下位の神将であると思われるが、ここに趙公明（趙元帥）と馬勝（馬元帥）の名が見えることは注意してよい。また、馬元帥の「靈官五郎」という名称は、後に「五通」「五顯大帝」との混同を招く要因であった可能性がある。なお宋無忌は、『搜神記大全』の中にこれを「火精」とする記載がある。

『無上玄元三天玉堂大法』は、撰者を記さないが、卷一の末に路時中の署名があり、南宋の始めの成書と考えられる⁴⁴⁾。この卷二十八に、馭邪院の神将として見えているのは、次の通りである。

天罡殺鬼大將軍
 上元將軍 唐宏
 中元將軍 葛雍
 下元將軍 周武
 三元麒麟使者 武剛中
 雷公猛吏 辛漢臣
 急捉将 鄧子信
 急縛将 毛当信
 斬鬼頭瀝血将 劉炎
 斬鬼頭瀝血将 劉志
 斬鬼頭瀝血副将 章自明
 (略)

ここでは、天罡將軍（天罡大聖）の他に、唐・葛・周の三將軍、さらに雷部の神として、辛元帥の名が見えている。

『上清天心正法』は、鄧有功の序文を付す。鄧有功は、南宋の人であり⁴⁵⁾、饒洞天がこの法を地中より得てより五伝の上、これを得たという。

その呪法においては、やはり黒煞神などの北極四聖が重視されているが、特に天罡大聖と三十六将を重視し、その職と姓名をすべて挙げている。『上清天心正法』の巻二に見える、三十六将の一部について次に示す。

都天捉鬼大将	陳希
雲路追捉大将	孫常
天司檢会大将	王和柔
飛天捷疾大将	許遜
驅遣精邪大将	趙充
天医治病大将	周洪
断除瘡痢大将	趙剛
解禳呪擔大将	王国賢
保護患人大将	由夔拳
直日捉邪大将	元廷臣

(略)

多くは、邪鬼などを捉える役割をもった神将であり、先にみた『無上玄元三天玉堂大法』の驅邪院の将と似たような性格を持つものが多い。ただ、ここには『三教搜神大全』に見える元帥神とは、ほとんど名称の一致するものはない。

『上清北極天心正法』の成立年代は不明である。ただ内容的には、『上清天心正法』と近い部分がある。ここでは北極四聖よりも、天罡大聖と部下の神将たちの方により重きが置かれている。その「天心法部将吏服色姓諱」には、次のようにある。

都天執邪大將	張廷申（披髮大紅袍、金甲仗劍）
橫天殺神大將	朱子真（披髮青袍、金甲執索）
衝天撰神大將	蘇成力（披髮黃袍、金甲持劍）
金天火輪大將	鄭天英（披髮阜袍、金甲持杖）
飛空金聖大將	趙天正（披髮白袍、金甲執枷）
炎空飛輪大將	王火光（披髮緋袍、金甲持火輪）
飛霄滅邪大將	劉次神（披髮紫袍、金甲握刀）
丹青聖神大將	胡中元（披髮阜袍、金甲執杖）
安神定魂大將	居子鎮（披髮緋袍、金甲仗劍）
追魂帰魂大將	杜剛志（披髮青袍、金甲執刀）
禁法神通大將	姚竟真（披髮緑袍、金甲仗劍）
追魑捉魅大將	許天信（披髮黃花袍、金甲持刀）
跳山入海大將	袁通靈（披髮青袍、金甲仗劍）

このように天心法の法術で神將として扱われる神々は、北極四聖や、天罡大聖と三十六將の組み合わせの事例が圧倒的に多い。これらの記載から窺えることは、南宋期までの天心法の体系では、『三教搜神大全』に見えるような温・関・馬・趙・鄧・辛などの元帥神をほとんど重視していなかったということである。

また『上清天心正法』の収録される『道蔵』洞玄部・方法類には、浄明道系統と思われる經典が続げざまに配置されている。すなわち、『上清天枢院回車畢道正法』⁴⁶⁾『許真君受鍊形神上清畢道法要節文』⁴⁷⁾『天枢院都司須知令』⁴⁸⁾『靈宝浄明天枢都司法院須知法文』⁴⁹⁾『靈宝浄明黄素書积義秘訣』⁵⁰⁾『太上靈宝浄明入道品』⁵¹⁾『靈宝浄明院真師密誥』⁵²⁾『太上靈宝浄明法印式』⁵³⁾『靈宝浄明大法万道玉章秘訣』⁵⁴⁾『太上靈宝浄明秘法篇』⁵⁵⁾『靈宝浄明新修九老神印伏魔秘法』⁵⁶⁾である。

これらの經典の正確な成立年代は不明であるが、恐らくその中には、南宋期に浄明道を盛んにした周真公に関わるものが多く含まれているものと思われる。

ここで重んじられているのは天枢院である。天枢院の性格も駆邪院同様、經典により異なるところがあり、複雑であるが、古くは「天枢」の字義通り、玉皇上帝や紫微大帝などが中心となる「天界の中心」を指すことがあった。また一方では、仙界の宰相府のようにこれをとらえ、初代天師張道陵をその主とする場合もあった。一部の經典では、駆邪院も天枢院の一部に属すとする。

しかし、ここに挙げた經典においては、許遜を始めとする「六真」によって主催される天の役所を指す場合が多いようだ。黄小石氏の指摘によれば、許真君信仰においては、もともと十二真君を尊崇することが行われてきたが、宋代の浄明道においては、六真崇拝が盛んになる⁵⁷⁾。

なお、『鑄鼎余聞』には次のような記載がある⁵⁸⁾。

国朝の陸鳳藻の小知録に言う。三天門下に泰元都省があり、張天師がここにいる。また天枢省には許真君がいる。天機省には葛仙翁がいる。⁵⁹⁾

むろん、ここに見える天枢省は、一般に考えられているものとは異なると思われる。しかし、このように「天枢」と許真君を結びつける考え方があったことは注意に値する。

さて、これらの浄明道系の經典のうち、幾つかは『高上神霄玉清真王紫書大法』や『上清天心正法』に類似した形式を持っている。特に『上清天枢院回車畢道正法』などは、「火鈴」「雷公」「黒殺」「天罡」などの符呪が見えており、雷法の影響を感じさせる内容を持っている。但し、ここでも元帥神に類する名称はほとんど見られない。また、これらの法術においては、陀羅尼系の呪文を使用することが少ないという特色がある。

いずれにせよ、『道法会元』や『三教搜神大全』に見える元帥神の多くが、宋代の神霄派・天心派、また浄明道系統の經典においてそれほど重視されていないことは、これらの元帥神の性格について考える上で注意すべきことであると考える。

5. 宋元の儀礼書における神将

南宋期の儀礼文献として重要なものに、『道蔵』正一部に収録される二つの『上清靈宝大法』がある。一つは「寧全真授、王契真纂」とする六十六巻の『上清靈宝大法』⁶⁰⁾であり、もう一つが、金允中による四十四巻の『上清靈宝大法』⁶¹⁾である。ここでは、それぞれ王氏『靈宝大法』、金氏『靈宝大法』と称することとする。

王氏『上清靈宝大法』に見える神体系は、かなりオーソドックスなものである。その体系は『雲笈七籤』に見えるものとよく似ている。王氏『靈宝大法』巻十には、天界の様相について書かれた一段があるが、そこでは、元始天尊・靈宝天尊・道德天尊の三清に続き、昊天上帝・救苦天尊・北極大帝・天皇大帝などの中心となる神々の名が挙げられ、三十二天帝・五斗・五天魔王などから、様々な靈官や真人が記される。また多くの儀礼文書の中には、三官や五嶽から、城隍神に至るまで、多くの神々の名が見える。

巻二十八には、三官について記した後、四聖について次のような記載がある。

北極天蓬都元帥真君蒼天上帝
 北極天猷副元帥真君丹天上帝
 北極翊聖儲慶保德真君皓天上帝
 北極佑聖真武靈応真君玄天上帝

北極四聖を、それぞれ帝号をもって称するが、依然として驅邪の神としては四聖を重んじていることが推察される。

王氏『靈宝大法』には、やはり天蓬・天猷の二元帥を除いては、元帥神に関する記載は少ない。また雷法については、これをあまり重視していないように思える。ただ、巻三十八に「神虎玄範門」があり、そこでは驅邪の神将として、趙公明の名が見えている。また、この法術については、『道法会元』に見られるものとかかなり類似する面がある。或いはこの部分は、後世の付加であるかもしれない。さらに、巻三十九においては、驅邪の将として「元始

上帝招真君靈大夫武卿崔文子・發放三界功曹所金闕上佐史珪璋」が挙げられている。

金氏『靈宝大法』が当時の儀礼文献の中でも特殊な性格を持つことについては、丸山宏氏の指摘がある⁶²⁾。その姿勢を反映してか、金氏『靈宝大法』においては、かなりオーソドックスな神体系に依拠しているのが看取できる。ただ武神としては北極四聖、及び唐・葛・周の三將軍などを重視している。

金氏『靈宝大法』卷三十九においては、「黄籙大齋醮謝真靈三百六十位」として金允中の想定した神々の体系を記している。ここでは、三清や玉皇上帝・紫微大帝・天皇大帝といった上位の神々に始まり、下位の城隍神や土地神に至るまでが階位に従って詳細に記されている。

しかし、ここには雷部の神々については、「五方五雷使者」「雷公電母大神」などと、非常に無個性な書き方をしており、雷部の神に固有なものとしては、せいぜい「社令雷神五雷直符張使者」の名が見える程度である。驅邪院に関しても「北極驅邪院官将吏兵」とあるだけで、具体的にどのような神を指すのかは不明である。両部の『上清靈宝大法』において、王契真はあまり意識せずに、そして金允中の方は恐らく意図的に、元帥神についてはほとんどこれを重視しない姿勢を示していると推察される。

『靈宝領教濟度金書』⁶³⁾は、三百二十巻にも及ぶ『道蔵』の中でも屈指の浩瀚な儀礼書である。この書は「竊全真授、林靈真編」とされ、元の大徳六年（一三〇二）の序文を有する。しかし、時に「大明国」とする記述があり、明代の修訂を経ていることは間違いない⁶⁴⁾。とはいえ、宋から明にかけての様々な儀礼を集大成したものとみられ、内容は非常に複雑でありかつ豊富である。

その巻二の「壇信経例品」では、それぞれの齋醮においてどのような神に上奏すべきかを述べる。そしてこの部分自体が、当時の道教における膨大な神体系を示すものとなっている。巻三から巻七までの「聖真班位品」においては、各神をどの位置に祀るかを示し、これにも夥しい神の名が記載されている。

ただ、卷十二から始まり、卷二百五十九まで延々と続く「科儀立成品」では、ある一定形式の奏文中に、神の名が記されるようになっている。例えば、卷十七では次のような神を挙げる。

太上无極大道虚无自然元始天尊妙无上帝

虚皇玉晨大道君靈宝天尊妙有上帝

万變混沌玄元老君道德天尊至真大帝

玉皇大天尊玄穹高上帝

紫微中天北極大帝

紫微上宮天皇大帝

高上神霄玉清真王長生大帝

東極青玄上帝

后土皇地祇

十方靈宝天尊

九天生神上帝

三十二天上帝

五方五老上帝

東華上相木公道君

西靈太真金母元君

日宮太陽鬱儀帝君

月宮太陰結璘皇君

南辰六闕上真道君

北極九府上真道君

五方五德上真道君

周天二十八宿真君

天地水三官帝君

泰玄枢機三省上相天君

九天諸司真君

天曹諸司真君

三天化主玄中大法師真君
 三天大聖都天大法天師真君
 靈宝經籍度師真君
 靈宝監齋大法師真君
 北極四聖真君
 三天門下三元真君
 三天門下上章詞表靈官
 十方无極飛天神王
 五天三界大魔王
 三洞四輔經籙法科上聖
 高真神仙將兵
 本靖諸省府院司將吏兵馬
 五嶽五帝真君
 五天聖帝
 洞天福地靖廬治化名山洞府得道真仙
 祖玄真師列位真人
 經籍度師列位真人
 北陰玄天酆都大帝
 東霞丹林扶桑大帝
 地水職司城隍社令里域土地監察神祇
 侍衛宣通无鞅聖衆三界官属一切真靈

上は三清四御から、下は城隍土地神まで、かなりオーソドックスな神体系が示される。文書によっては、太乙救苦天尊や雷声普化天尊など、中心になる神は変わるものの、一貫してこれらの神々の名を連ねる。例えば、卷四十一では冥界の十王が中心となるものの、やはり「法位」においてほぼ同じ神名を列挙する。

また多くの儀礼文書の中で、北極驅邪院と上清天枢院・五雷院・功德院などが併称される。ただ、神将の中でも重視されるのは、「北極驅邪院四聖」

の他、「九天普度院守雄抱雌二大将」などもある。卷九十九の記載によれば、「九天普度院」の下にも三十六将軍が配置されている。普度院について、ここでは馭邪院と同じような性格と見なされているようであるが、その詳細についてはよく分からない。

『靈宝領教済度金書』の内容は、卷二百六十からは符呪とそれに関連する法术が中心となる。これより「唵吽吽波吒吒」などの陀羅尼系の呪文の呪文も目立つようになる。但し、この傾向は卷二百八十一までは濃厚に見られるものの、卷二百八十二の「存思玄妙品」からはまたその傾向が薄くなる。

そして奇妙なことに、これだけの膨大な記事が存在する中で、元帥神に関する記載はほとんど無いに等しい。天界の神将が挙げられているところにも、ほとんどその名は見えない。ただ、全く存在しないわけではなく、若干元帥の登場する部分もある。例えば、卷十二においては、天界の兵馬についての記述があり、その中では次のように述べている。

天欵火律令大赤元帥 鄧將軍
 九天遊奕北極正一魁神純真元帥 馬將軍
 護道崇寧威烈 関將軍
 昭武翊靈正佑 温將軍

すなわち、鄧天君・馬元帥・関元帥・温元帥の名が見えている。この記載が後に加えられたものかどうかは判定しにくいだが、『靈宝領教済度金書』の神体系の中では、若干系統の異なるものであると考えられる。この他では、鄧・辛・張の三天君の名はまれに登場する。しかし総じて、この經典においても元帥神の影は薄いと言ってよいであろう。

また注意すべきは『無上黄籙大齋立成儀』⁶⁵⁾である。この書は「留有光伝、蔣叔興編」と伝えられ、その多くは南宋期に成立したと考えられるものの、一部明人による付加があるともされ、各部の成立年代はいまひとつ判然としない⁶⁶⁾。

卷三の「予告門」などにおいては、むしろ両部の『上清靈宝大法』などに

似て、オーソドックスな神体系が記される。すなわち、三清や玉皇上帝や紫微大帝、太乙救苦天尊や三十二天帝といった上位の神から、五嶽や水府などの中位の神を経て、城隍神などに至るものである。また巻五に見える、天枢院などの性格づけには注意が必要であろう。

上清天枢院天将天兵
北極驅邪院神将神兵
玉枢五雷院雷将雷兵

すなわち、天枢院・驅邪院・五雷院の三種を並置している。むろん、雷法を非常に重視しているのは明らかである。

但し、『無上黄籙大齋立成儀』巻十二の儀礼文書に「大明国某布政使司某府州」とあることから見れば、この書は明人による付加があるのは間違いないと思われる。そのため、この書においては、南宋期と明期の神体系が併存していると考えられる。巻三十一に見える長生大帝配下の神将は次の通りである。

運陽化陰大將軍 楊元光
混景大將軍 丁忠
合元大將軍 丁遷善
会靈大將軍 陳志元
陰陽大將軍 王先之
変靈大將軍 張同
運化大將軍 李淵
陽光大將軍 申孚（略）

しかし、この書における最も特徴的な記事は、巻五十一から巻五十六に見える、膨大な数の神を記載した「神位門」であろう。これだけの神体系を明確に記した経典は少ない。ただこの記載に関しては、全真教において重視され

る神仙を多く含んでいることから、恐らくは元代以降に付加されたものであると考える必要があるだろう。

とはいえ、その巻五十二に記す元帥神の記載は、道教の神譜に明確に元帥神を位置づけたものとして非常に重要であろう。「神位門左二班」には、まず多くの神仙を列記する。

清微宗主真元妙化上帝

太初天君紫宸太華天帝

(略)

浄明道師九州都仙大使神功妙济真君

(略)

正一嗣師真君

正一系師真君

正一左侍 王真人

正一右侍 趙真人

(略)

神霄五師真君

雷霆教主 火師真君

(略)

眉山混隱 南真人

丹山雷淵 黄真人

西山真息 熊真人

泰智冲和 彭真人

武当五龍雲萊葉 張真人

太極北靈内輔 鄭真人

稚川抱朴仙翁 葛真人

南海 鮑仙姑

全真大教 東華少陽帝君

正陽 鍾離帝君

純陽 呂仙帝君

海蟾 劉帝君

重陽 王帝君

(略)

神霄得道輔教宗師 林真人

玉府上宰神霄左掌雷 王真人

金鼎妙化執法 申真人

玄都御史神烈 吳真人

張真人・葛真人などの伝統的な道教の神仙に、東華帝君・呂洞賓・鍾離権・王重陽といった全真教系の真人、さらに王文卿や林靈素などの神霄派の者まで、およそ宗派の異なるものでもすべて並置している。このような統合的な配置が可能であるということ自体、元代の全真教や正一教の発展を反映しており、この部分の成立が遅いことを示していると言えよう。恐らくこの部分については、『道法会元』と編纂時期が近いのか、やや遅れるのではないかと推察される。

さて、『無上黄籙大齋立成儀』巻五十二では、これに続いて多くの元帥神が列挙される。

清微三炁九霄符章經道雷帝天君

雷霆欵火律令 鄧天君

雷霆正令都督尚書 辛天君

雷霆行令飛捷応報 張天君

三山木郎皓畢 荀天君

火鈴督雷 宋將軍

雷霆枢機 竇天君

霆首大神 馬天君

神烈陽雷 荀天君

神化陰雷 畢天君

洞神主副 龐·劉二天君
神霄樞機 程·雍二元帥
洞玄主帥蒼牙鐵面 劉天君
神霄妙帥金火 張天君
天医 趙·許二元帥
雷霆風雷昌陽大將軍
雷霆火令舍陰大將軍
九天烈雷昭真 楊符使
九天捷疾焚炎 楊符使
雷霆三五火車鐵面雷公 王元帥
神霄驅雷霹靂 程元帥
統轄社雷 蔣大將
南宮琰摩羅 朱將軍
正一靈官 馬·陳·朱·蕭·鄭五大元帥
都天太歲至德 殷元帥
遣瘟滅毒 翁元帥
九天雷路神捷上將玄壇 趙元帥
雷火符使 曲元帥
清微 周·嚴二元帥
三光符使 溫·耿二元帥
九天考不信道法 朱將軍
北方風輪蕩邪 周元帥
天医院 趙·馬·黃三元帥
神霄玉部翻解 顛·張二使者
神霄普倒 趙金剛
捷疾黑面 雷元帥
五丁都司 何元帥
酆都主將 楊元帥
巨天力士 孟元帥

朗靈義勇 関元帥
 地祇上将 温元帥
 急報無佞 康元帥
 英雄猛烈 鉄元帥
 地祇忠烈 王・張二元帥
 天心雷霆諸階法中雷帥官君
 玉枢三十六雷君
 雷霆諸司諸部雷神
 神霄内外台諸部雷神（略）

ここでは、『三教搜神大全』に記載のある元帥神のほとんどの名が見える。『道法会元』では幾つかの神系統が入り交じっているが、この『無上黄籙大齋立成儀』では、これを一つの体系にまとめており、当時の神体系を知る上で貴重なものといえる。ただ、恐らくは同書の儀礼文の中に「大明国」とあるのと同様、この部分も明代に造作されたものであろう。これをもって南宋期の元帥の体系とみなすことは難しい。ただ、元帥神がこのように見事に体系づけられているのは珍しく、その上では重要な資料であると考ええる。

6. 白玉蟾の論議について

白玉蟾は、『海瓊白真人語録』⁶⁷⁾の中において、法術や神将についてやや詳しい議論を行っている。これは南宋当時の神体系についての興味深い説であると言える。『海瓊白真人語録』巻一に、弟子との対話があって言う。

真師（白玉蟾）が言う。「北極驅邪院はもと、ただ崔・盧・鄧・竇の四名の神将があるにすぎなかった。いまはそれに四名の神将を増やしている。梅仙考召院は、もとは、潘・耿・盧・查の四名の神将だけであったものが、いままた四名を増やしている。これは後人が勝手にやったものだ。本来の法術には、このようなものは無かったはずである。」⁶⁸⁾

真師が言う。「古の法官は、黄・劉の二神将を用いた。そしてまた高・丁の二将、焦・曾の二将を用い、さらに桑・何の二将、許・謝の二将がある。その師から受けたものであれば、靈驗は必ずある。」⁶⁹⁾

真師が言う。「いにしえには酆都法というものは無かった。これは唐の末に、大円呉先生が始めてこの法を世に伝え、鬼神を使役したのである。しかしこの法には元来は八将・三符・四呪の法、及び酆都総録院印の法があるだけであったはずだ。ところがまた後人が勝手に法術を増やして、非常に煩瑣なものになった。これがどうして正法と言えるだろうか。」⁷⁰⁾

真師が言う。「法において北極驅邪院と明言しているのは、天機院のことを言うのである。南極に天枢院があるのは、天上の左に天枢省があり、右に天機省があるようなものである。天機とは北極の内院であり、驅邪院は外院である。かの天枢とは、南極の内院のことである。南極にはまた進奏院があり、これも外院である。」⁷¹⁾

これらの論の当否はともかく、この論議は、白玉蟾の当時において、それまでの法術にさらに様々な神々が付加され、法術ごとの神体系が変化していく過程がまさに進行中であったことを示すものであろう。

注意したいのは、ここで崔・盧・鄧・竇の四名の神将を、白玉蟾がかなり古いものと見なしている点である。これら四将は後にその地位が曖昧になった面もあるが、本来は唐・葛・周の三將軍と同様、古い来歴を持つ神将であった。『水滸伝』は、最終的には明代の成立とはいえ、かなり宋元の民間信仰の古い層を反映している部分があるが、その第七十一回で陣没した晁蓋のための齋醮を営むところ、監壇の神将としてその名が見えているのが、崔・盧・鄧・竇の四将である⁷²⁾。むろん、この四将については、現在の道教儀礼の文書中にもよくその名が見えているという面もある。

そしてここで白玉蟾の言及する神将のほとんどは、温・関・馬・趙といった元帥神ではない。

また天枢院については、白玉蟾はこれを南極にあるものとし、「南極天枢院」と称する。別の意味からすれば、このような議論をせねばならなかったほど、天枢院の性格は明確でなかったのであろうか。またここで「天枢省」と「天枢院」を別のものとしているのは、注意すべき点である。ただ、『無上黄籙大齋立成儀』と同じように、天枢院を北極駆邪院と対をなすものと見なしているのは明らかである。それにしても、白玉蟾が「後人が付加した」と強調する神将にも元帥神らしき名称が少ないということは、この時期に数多くの神将が考え出され、そして消滅していった過程が垣間見えているように思える。

また『海瓊白真人語録』巻二には、次のような記載がある。

祖師（玉蟾）が言う。「わたしはこのように聞いている。漢の陸賈は玉清元始法師総仙上真領黄籙院事となり、また辛漢臣は、いま雷霆都司狼牙猛吏となっている。そして晋の陶弘景は、いま蓬萊都水司監となっている。また唐の褚遂良は、いま五雷使者となっている。顔真卿は、いま北極駆邪院左判官となっている。李陽冰は、いま北極駆邪院右判官となっている。李白は、いま東華上清監清逸真人となっている。白樂天は、いま蓬萊長仙主となっている。また晋の女仙である魏華存は、いま紫虛元君領秩仙公となっている。唐の女仙謝自然は、いま東極真人となっている。」⁷³⁾

この説の一部、顔真卿に関する記述は『三教搜神大全』巻七の「北極駆邪院」に引用されている。注目すべきは、辛漢臣、すなわち辛天君の名が明確に雷部の神将として見えていることである。しかしこの説は、総体としてみれば、史上の人物に適当に仙界の役職を割り振った感があるのは否めない。

『道法会元』巻七十に引く『玄珠歌』は、「王文卿撰、白玉蟾註」とされている。ここでは内丹思想と雷法の融合が図られているが、その意図は成功し

ているとは言い難い。ただ、白玉蟾の註に言う。

三帥とは、鄧・辛・張の三元帥のことである。心は鄧元帥、肝は辛元帥、脾は張使者である。意が誠ならば張使者が肝に至り、怒れば辛元帥が心に臨む。火が大いに発すれば、すなわち欵火が降る。これが「三帥化形」ということである。⁷⁴⁾

むろん鄧・辛・張などの雷部の天君については、早くから既に道教に取り入れられていた可能性が高いので、この記述は白玉蟾の説をそのまま反映しているものとしてよい。これらの記載から、南宋期にどの元帥が有力であったかを推察することは可能であろう。

7. 清微派の經典における雷神

さらにもう一つ、雷法において重要な派に清微派がある。『清微仙譜』⁷⁵⁾では、第十代とされる黄舜申までの系譜を強調するが、実際に派として盛んに活動を始めたのは黄舜申以降のことであるとされる⁷⁶⁾。清微派の經典としては、『清微元降大法』⁷⁷⁾『清微神裂秘法』⁷⁸⁾などがある。もっとも後述するように、『道法会元』も実際には清微派、及び正一教の強い影響下のもとに作られたものである。

『清微神裂秘法』は、特に選者を記していないが、張守清や張守一の名が見えることから、元末のものとされる⁷⁹⁾。その巻上の「雷奧秘論」では、神霄と清微の共通性を強調している。「師派」においては、魏華存・張道陵・許遜・祖舒などの仙師を列挙する。これはむろん、雷法の諸派と正一系の融合を意識した配置であると思われる。

この『清微神裂秘法』で重視されている雷部の神は、苟天君と畢天君である。法を司る神としては、歴代の祖師と普化天尊を中心に据えるものの、実際の法術で重視されるのは、あくまで苟・畢の二神将である。巻上には次のように記す。

清微主帥上清神烈陽雷神君 苟留吉

清微主帥上清神烈陰雷神君 畢宗遠

この他に見える神将としては、「清都策命符使田仲・九天雷火法令符使陳榮臣・捷疾符使楊傑」などがある。

『清微元降大法』では夥しい数の神将が存在する。例えば、卷十三には次のような記載がある。

帥班

太乙端靈洞耀炎光霹靂風雷元帥 許彦昌（天冠王者状 金甲朱衣執節朱履）

将班

追風使者 虞仲

追雲使者 郭阜臣

追雷使者 儲烈

追電使者 張臣元

追雨使者 師鑄

追龍使者 湯堅

追催使者 方俊（並交脚幘頭青面朱髮 金甲朱衣皂靴）

太乙月孛流光冲元符使 朱興（金兜鑿面碧三日 金甲朱衣紅履執戟）

太乙五雷伝令符使 丘亮（玄冠面赤 金甲緑衣朱履執戟）

この他、卷十三には、「辛漢臣・江赫冲・秀文英・方道彰・陳華夫・馬鬱林・郭元皇・田元宗・鄧拱辰・方仲高・張元伯」、「劉彦昌・朱龍延・康春・師亮・李大淵・尚方」、卷十四には「竇霹初・鄧伯温・辛漢臣・張元伯・劉明・朱興・荀敷演」などの神将の組み合わせが見える。これらの天君の名が見えるのは重要であるが、ただあくまで将班の一部を構成するにすぎないことについては、留意する必要があるだろう。

また卷『清微元降大法』十七の「上清西禁大法」においては、その主とな

る神将として「趙公明」の名が見られ、鉄鞭に黒虎に跨るという形象が見られる。趙公明は、この他にも多くの法術で主帥となる。また同じく卷十七の「天罡火雷大法」にはその主帥として、「天罡大聖節度真君」の名が見える。

これらの記載から見るに、鄧天君や趙元帥などの元帥神の多くは、清微派において一定の地位を得ていることは間違いないと思われる。

興味深いのは、時に仏教の神仏が「大元帥」として見られることである。卷十三の「西極真梵大覚慧妙五雷上経」の部分には、以下のような記載が見える。

神班

主帥 金吒大聖覚皇上帝能仁智聖天君 壯（即釈迦）

（略）

副帥 円明威神大元帥通済法海天君 摩尼羅（即龍樹）

すなわちここでは、釈迦仏と龍樹が、道教の神将として元帥神と同じ機能を果たしている。

また『清微元降大法』においては、神将たちの形象に、仏教からの影響を受けたと推察されるものが増えてきている。まず「三目」や「五目」の神将が多く見られるようになり、また例えば、卷十四の「霹靂使者」には「風輪を背にする」「水輪を背にする」「火輪を背にする」というような姿が特徴的になる。もっとも清微派の想定する神体系については、むしろ『道法会元』の前半の記載を見るべきであると考えられる。

8. 『道法会元』と雷法の系譜

さて『道法会元』は、神霄・天心派などから清微・靈宝派に至るまでの、多くの諸派の法術を集大成したものである。そして前にもふれたように、ここでは多くの元帥神が法術の中心的な地位を占めるに至っている。

『道法会元』は二百六十八巻もの分量を擁する『道蔵』中でも屈指の大部の經典である。この書の正確な編書年代は不明であるが、第三十九代張天師

の張嗣成などの名が見えることから、元末明初に編纂されたものとされる⁸⁰⁾。

『道法会元』においては、『清微元降大法』よりも進んで、仏教、特に密教の濃厚な影響が見られるのが特徴である。例えば、巻六の「玄一碧落大梵五雷秘法」においては、主法に元始天尊・靈宝天尊・道德天尊の三清を置きながら、将班に「観音大士化身」を配する。巻二百三十の「上清馬陳朱三靈官秘法」には、軍荼利明王や、哪吒太子の名が見える。また「唵吽吒唎」といった陀羅尼系の呪文は、随所で使われるようになり、さらに神将には、「三面六臂」などといった姿が顕著に見られるようになる。雷法が密教から受けた影響について、李遠国氏は次のように論ずる⁸¹⁾。

道教の雷法の中には、仏教の唐代密教の修養法が大量に入り込んでいる。(略) 道教の神霄派は大量に密教の真言梵呪を採用し、修真達靈といった目的に用いている。例えば『先天雷晶隱書』に収録する真言密呪は二十余種ほどであり、その中でも最も重要と思われるのは「天母心呪」だが、それは一字も変わらず、密教流伝の「摩利支天真言」と一致するものである。その主法の神に擬せられているのは、一つは高上神霄玉清真王長生大帝であり、もう一つは、斗母摩利支天大聖である。前者は道教の神であり、後者は密教の神である。その主神から、呪文や修法や法術に至るまで、すべてここでは密教と道教を双方ともに修めるといった姿勢が貫徹している。これはすなわち、当時においては道教と密教が互いに融合していることを示すものと考えられる。

密教との融合のみならず、『道法会元』においては、正一・靈宝・清微・神霄・天心・地祇・酆都など、様々な法術の融合が図られている。ただそれらはあまり整理されない形のまま取り込まれているため、一見、この經典は非常に蕪雑であるという印象を受ける。

以下に『道法会元』各巻とそこに収録される法術の一覧を掲げる。

卷数	編名
1	清微道法樞紐
1	道法九要
2	清微応運
3	清微帝師宮分品
4	清微宗旨
5	清微符章經道
6	玄一碧落玄梵五雷秘法
6	清微妙道雷法
6	霹靂驅蝗大法
7	上清洞明協神五炁大法
7	上清鎮靈福祥大法
7	上清司禁輿道大法
8	清微祈禱內旨
9	清微梵炁雷法
10	清微法職品格
11	清微天寶玄經上
12	清微天寶玄經下
13	玉宸登齋符篆品
14	玉宸登齋內旨
15	玉宸鍊度符法
16	玉宸鍊度符法
17	玉宸鍊度內旨
18	清微發遣儀
19	玉宸鍊度諸符簡儀
20	玉宸經法鍊度儀
21	玉宸經鍊返魂儀
21	分胎破穢儀
22	清微玉宸鍊度文檢
23	清微玉宸鍊度文檢
24	清微灌斗五雷大法
25	清微灌斗五雷奏告儀

26	玄靈解厄品
27	玄靈解厄文檢
28	清微紫光奏告符法
29	清微祈禱奏告大法
30	紫極玄樞奏告大法
31	玄樞玉訣秘旨
32	上清龍天通明鍊度秘法
33	上清龍天明鍊度科
34	清微龍天内鍊秘旨
35	清微通明鍊度文檢
36	正一靈官馬元帥大法
36	神捷勒馬玄壇大法
36	地祇上將陰雷大法
36	蓬玄撰正雷書
37	上清武春烈雷大法
38	上清紫庭秘法
38	靈佑忠烈大法
39/40	清微伝度文檢
41	清微言功文檢
42	清微仕進文檢
43	清微保生文檢
44	清微禳疫文檢
45	清微禳兵劫文檢
46	上清神烈飛捷五雷大法
47	神捷五雷祈禱文檢
48/49	神捷五雷祈禱檢式
50	清微祈晴文檢品
51	清微祈雪文檢
52	清微驅蝗文檢品
53	清微禳卻蛟虎文檢品
54	清微謝雷文檢品
55	清微治顛邪文檢品

56	上清玉府五雷大法玉樞靈文
57/60	上清玉樞五雷真文
61/62	高上神霄玉樞斬勘五雷大法
63	玉樞斬勒五雷祈禱大法
64	玉樞斬勒五雷大法
65	三炁雷霆諸部聖位
66	雷霆綱目說
67	雷霆玄論
67	雷說
68	雷霆三司祈禱秘訣
69	王侍宸祈禱八段錦
70	玄珠歌
71	虛靖天師破妄章
72	雷霆默朝內旨
73	天書雷篆上
74	天書雷篆中
75	天書雷篆下
76	汪火師雷霆奧旨序
77	雷霆妙契
78	雷霆妙契
79	雷霆契勘
80	欸火律令鄧天君大法
81	負風猛吏辛天君大法
82	先天一炁火雷張使者祈禱大法
83/87	先天雷晶隱書
88	雷晶使者祈禱行檢
89	九天雷晶元章
90	先天一炁雷法
91	雷霆六乙天喜使者祈禱大法
92	先天六一天喜使者大法
93	雷霆三要一炁火雷使者法
94	雷霆欸火張使者秘法

95	雷霆飛捷使者大法
96	太乙捷疾使者大法
97	上清飛捷五雷祈禱大法
98	九天碧潭雷禱雨大法
99	昊天金闕五雷祈禱秘法
100	雷霆鉄笏召龍致雨符法
101	五雷祈禱行持秘法
102	五雷祈禱符法
103	五雷祈禱大法
104/108	高上景霄三五混合都天大雷琅書
109	混沌玄書
110	混沌玄書大法
111/113	帝令宝珠五雷祈禱大法
114/120	太極都雷隱書
121	南宮火府烏暘雷師秘法
122/123	太上三五邵陽鉄面火車五雷大法
124	上清雷霆火車五雷大法
125	九州社令蛮雷大法
126	九州社令雷法
127	九州社令陽雷大法
128	九州社令陽雷祈禱檢式
129	雷霆箭箒年月枢機
130	北真水部飛火擊雷大法
131	石匣水府起風雲致雨法
132	雷霆祈禱秘訣
133/134	太乙真雷霹靂大法
135/141	太一天章陽雷霹靂大法
142/143	太一天章陽雷霹靂大法行遣部
144/145	太一天章陽雷霹靂大法
146	正一忠孝家書白捉五雷大法
147/153	洞玄玉枢雷霆大法
154	混元六天妙道一炁如意大法

155	混元六天如意大法
156/166	上清天蓬伏魔大法
167	上清天蓬伏魔大法補遺
168	上清天蓬伏魔大法
169/170	混天飛捉四聖伏魔大法
171	上清童初五元素府玉冊正法
172/173	元応太皇府玉冊
174	元景丹天府玉冊
175	元照靈虛府玉冊
176	元和遷教府玉冊
177	元素元輝府玉冊
178	五府冊文正法後序
179/187	上清五元玉冊九靈飛步章奏秘法
188	太乙火府五雷大法
189	太乙火府奏告心文
190	太乙火府五雷大法
191	太乙火府通神內殿秘法
192	太乙火府通神內殿祈禱秘法
193	太乙火府內旨
194	太乙火府五雷大法行移
195/196	混元一炁八卦洞神天醫五雷大法
197	九清太皇府天醫八卦洞神五雷大法
198	神霄金火天丁大法
199	金火天丁神霄三炁火鈴歌
200	金火天丁鳳炁紫書
201	金火天丁玉神解閔雲篆
202	神霄金火天丁大法
203	金火天丁撰召儀
204	金火天丁起靈受鍊儀
205	金火天丁陽茫鍊度儀
206	金火天丁召孤儀
207	太極葛仙翁施食法

208	太極玉陽神鍊大法
209	玉陽祭鍊文檢品
210	丹陽祭鍊内旨序
211	天候生煞大法
212	中皇総制飛星活曜天罡大法
213	広靈宣化陳將軍秘法
213	神霄黒虎劉元帥秘法
214	玉音乾元丹天雷法
215	元皇月孛秘法
216	九天玄女竈告秘法
217	紫庭追伐補断大法
218	紫庭追伐補断大法
219	神霄断瘟大法
220	神霄遣瘟送船儀
221	神霄遣瘟治病訣法
222	正一吽神靈官火犀大仙考召秘法
223	上清都統馬元帥驅邪秘法
224	金臂円光火犀大仙正一靈官馬元帥秘法
225	火犀大仙馬靈官大法
226	正一靈官馬帥秘法
227	太一火犀雷府朱將軍考附大法
228	雷府朱帥考邪大法
229	靈官陳馬朱三帥考召大法
230	上清馬陳朱三靈官秘法
231	上清正一三景靈官秘法
232	正一玄壇趙元帥秘法
233	玄壇趙元帥秘法
234	正一龍虎玄壇金輪執法如意秘法
235	正一玄壇飛虎都督趙元帥秘法
236	正一龍虎玄壇大法序
237	玄壇如意大法
238	清微西靈崇明丹華大法

239	上清沖和妙道昭元五雷玄壇大法
240	正一玄壇元帥六陰草野舞袖雷法
241	雷霆三五火車靈官王元帥秘法
242	豁落靈官秘法
243	南極火雷靈官王元帥秘法
244/245	玉清靈宝無量度人上道
246	天心地司大法
247	北帝地司殿元帥秘法
248	地部金官如意潘將軍秘法
249/250	太上天壇玉格
251/252	太上混洞赤文女青詔書天律
253	地祇法
254	東嶽温太保考召秘法
255/256	地祇温元帥大法
257	東平張元帥秘法
258	東平張元帥專司考召法
259	地祇馘魔閔元帥秘法
260	酆都朗靈閔元帥秘法
261	酆都車夏二帥秘法
262/263	酆都考召大法
264	北陰酆都太玄制魔黑律収撰邪巫法
265/266	北陰酆都太玄制魔黑律靈書
267/268	泰玄酆都黑律儀格

膨大かつ蕪雑に見える『道法会元』の内容であるが、その編纂に対しては、それなりに一定の傾向があるように感じられる。

まず、清微系の法術の重視が挙げられる。すなわち、『道法会元』巻一の「清微道法枢紐」から巻五十五の「清微治癩文檢」に至るまでは、題名に「清微」と冠するものが多く、ここからは清微系の法術を特別視する姿勢が窺える。

巻五十六からは、「神霄」「雷霆」「上清」を冠した法術が多くなる。また巻六十五から巻七十九までは、主として雷法の理論について述べたものが大

半を占めている。特に卷六十八から卷七十七までは、王文卿・張虚靖・薩守堅などの雷法の祖師たちの言辞を収めており、その資料的な重要性は高い。また後半、特に卷二百以降においては、天心・地祇・酆都などの諸派の法術が収録されており、ここは民間系の法術を特に配したように思える。例えば、卷二百四十六の「天心地司殷元帥秘法」や卷二百五十三の「地祇温元帥大法」、それに卷二百六十一の「酆都孟元帥秘法」などがそれである。

雷法のうち幾つかは、その名称から系譜が伺える場合がある。

例えば、林靈素の傾向を直接継ぐと思われるのは、「金火天丁」と称される幾つかの法術である。この流派は、林靈素－張如晦－陳道一という系譜で伝えられた⁸²⁾。

また「先天雷晶隱書」は、王文卿から上官真人を経て、鄒鉄壁に伝えられたとする⁸³⁾。さらに「九州社令」は、万鼎新－王宗伯－青陽鼎－梁天津－蕭道淳－劉徳清－王一玄－王明渭と伝授された⁸⁴⁾。同様に「太乙火府」「八卦洞神」なども、それぞれ法術の伝授が想定される。これらについては、ストリックマン氏の示唆した系譜をより緻密にする形で、李遠国氏が整理を行っている。それによれば、神霄派は、南宋から元において膨大な数の流派を産み出して発展していった。その多くは、現在では伝統が失われてしまっているようである。

これらの流派を担う者たちが、すべて道士の階層に属した者であったかどうかは疑わしい。例えば、『道法会元』卷二百五十三に「地祇法」及び「地祇諸余論」があり、その中で、地祇法を伝える流派が数多く存在したことを述べる⁸⁵⁾。

地祇一司の法は、実にその教を虚靖天師から始める。次に顕化したのは、天宝洞主王宗敬真官であり、次に青城吳道顕真官、青州柳伯奇仙官、果州威恵鐘明真人と、相継いで宗師となられた。その後は、江・浙・閩・蜀・湖・広などの地方で法を嗣ぐ者多く、その姓名も福・寧の幾人に限られるわけではない。そもそも伝書には石碑に基づいたものがあり、継いで数多くの流派に流伝していった。す

なわち、鉄林府地祇・原公夫人廟地祇・五雷地祇・五虎地祇・索子地祇・十字地祇・四凶地祇・聖府地祇などである。さらに後に蘇道濟派・温州正派・李蓬頭派・過曜卿派・玄靈統派などの流派があった。これらのごときは数えきれるものではなく、多くの支派が存在したのであった。⁸⁶⁾

これによれば、地祇法はすなわち第三十代張天師とされる張虚靖から伝えられたもので、王宗敬・呉道頭・柳伯寄などが宗師となり、伝授せられた。しかしその後数多くの支派が出現し、「鉄林府地祇・原公夫人廟地祇・五雷地祇・五虎地祇・索子地祇・十字地祇・四凶地祇・聖府地祇」などの諸派が独自に法を伝えていた。これらの流派の名称を見るに、いかにも民間信仰的な呼称も目立つ。ある種、これらの法術を使っていたのは、むしろ民間系の術者であろう。

これらの数多く存在した流派の全容について把握することは不可能であろう。よってここでは、あくまで元帥神の記載を中心に、『道法会元』に現れる神の体系について見ていくことにする。

9. 『道法会元』における元帥（一）——清微・神霄系法術

さて『道法会元』巻三の「清微帝師宮分品」においては、清微派の神々の位階表が特に設けられている。ここではまず三清・玉皇上帝・紫微大帝・天皇大帝・救苦天尊・普化天尊などの道教の正統的な神々が列挙されている。続けて、北斗・南斗や十一曜などの星神、そして三官大帝・四聖などの名が見える。当然ながら、中でも「清微宗主真妙化大帝」は中心的な位置を占めている。そして「帥将」の部分では、鄧天君をはじめとする元帥神の名が見える。

元始北極天王天雷轟元 鄧雷君
北極安景令王地雷鎮玄 辛雷君
暘谷太霞靈王水雷環運 張雷君

九斗陽芒流金火鈴威雷浮光 劉天君
 三山木郎大神皓靈 苟神君
 上清璇天刑令大神枢機 竇真君
 神霄玉都陽雷陰霆西極上將神變 留真君
 沖天明道執法仁聖応元真君飛捷 楊符使
 飛天妙道威化聖仁神烈真君焚炎 楊符使
 妙道沖儀聖仁通華真君雷霆捷疾 朱符使
 景靈通道仁聖元妙真君飛捷 楊符使
 承天沖和保生聖元明道真君九天沖虛飛雷 安符使

すなわち、鄧・辛・張・劉・苟・竇・劉・楊・朱・安の各天君や使者である。この後には東嶽大帝はじめ、五嶽の神や四海の神が配される。すなわち、これらの天君は、天界の最後列に位置する。この組み合わせは『清微元降大法』巻十四にあった竇・鄧・辛・張・劉・朱・苟の諸天君の配列に近い。また、巻十七では苟・畢二將を重視する。この考え方は『清微神裂秘法』に近い。

巻二十二「清微玉宸鍊度奏申文檢」においては、三清・玉帝・紫微大帝などに上奏し、神將の助力を請うが、そこに挙げられる神將名は次の通りである。

陽雷神君 苟留吉
 陰雷神君 畢宗遠
 火鈴大將 劉明
 焚炎符使 楊傑（略）
 解冤符使 顯惡
 陽神 何昌
 陰神 喬苟（略）
 酆都追撰元帥 関羽
 地祇上將 温瓊

苟・畢二天君のほか、関元帥や温元帥の名がある。卷二十三では、魏華存と祖舒を主法とし、温・関の二元帥を中心とする法が幾つか見られる。

一方で、卷二十六の「清微道法・玄靈解厄品」においては、次のような神々が中心となる。

主法

清微宗主真元妙化天帝

帥班

北極闔陽掌善使者 楊汝明

北極啓陰察惡使者 耿妙真（略）

掌急奏太一天君 王震（略）

枢靈大神 劉洪

総真使者 龔徳（略）

北極循璇霹靂灌斗暘谷神君 張靈（略）

五都飜解冤結使者 顓惡

清微の主たる妙化天帝に、楊・耿などの二使者が中心となる。ここに見える顓使者などについては、『無上黄籙大齋立成儀』にもその名が見えている。

卷二十九の「清微祈祷奏告道法」には、「主将陳元帥」「副将石元帥」とあり、『三教搜神大全』に見える石元帥が登場している。石元帥については、他の儀礼文献でもあまり記載が無いため、その性格はやや捉えにくいものとなっている。

卷三十六「正一靈官馬元帥秘法」は、馬元帥を中心とした法術である。馬元帥は、道教の儀礼文書では、名を「馬勝」とされることが多い。四大元帥（温・関・馬・趙元帥）の一であり、五顯靈官・華光神と同一視される。ここでも主法となるのは、祖舒と魏華存であり、神将としては、正一靈官馬勝と、それから威光大将馬充とが帥班に当てられている。『道法会元』においては、「馬元帥」は馬勝と馬充の二者が存在する。『三教搜神大全』に見える馬元帥は、正一靈官馬勝の方を指しており、馬充ではない。

同じく卷三十六の「地祇上将陰雷大法」においては、主法を祖舒・魏華存とし、神将としては温元帥などが中心となっている。

地祇上将亢金昭武顯徳元帥 温瓊
鉄・畢・黒・方四雄上将
薛・徐・許・郝四大猛将
劉・張・趙・史・周五雷使者
聴令郎君小亭侯 張元帥
伝令直符 張使者

温元帥は、名を温瓊といい、やはり四大元帥の一である。『三教搜神大全』に記載がある。ここでは「地祇上将」としての性格が強調されている。同様に、卷三十六の「蓬玄撰正雷書」では、魏華存を主法として、神将は関元帥が中心となる。

轟雷撰正青靈上衛上将 関元帥（名羽）
副帥肅忠 趙將軍（略）
将佐
李貢・張端・劉昇・石盈 四大神将

関元帥は、言うまでもなく後の関聖帝君であり、三国の武将関羽である。四大元帥の一であり、『三教搜神大全』、及びその前身である『搜神広記』に記載がある。『道法会元』における関羽は、「酆都馘魔元帥」と呼ばれ、酆都法との関連が濃厚である。

卷三十七の「上清武春烈雷大法」は、太歳殷元帥を中心としたものとなっている。

上清武春猛吏太歳至徳尊神元帥 殷郊（略）
副将贊神 侯將軍

巫将鷓鴣 王將軍
 通靈報応 蔣使者
 毛・趙・耿・郭四大吏兵
 神荼・鬱壘大神
 黄幡・豹尾大神（略）

殷元帥は、やはり『三教搜神大全』に記載がある。殷元帥は『道法会元』中では猛吏太歳と称され、時を支配する神として現れる。その姿は「九つの髑髏を首に掛け、左手に金の鐘、右手に黄鉞を執り、九頭の金牛に乗る」というものである。

『道法会元』の卷三十八「上清紫庭秘法」では、清微妙化大帝を主に、その神将は「紫庭上将朗英・薛元」となっている。同じく卷三十八「靈佑忠烈大法」では、「靈佑滅殛忠烈元帥康徳」とあり、康元帥が中心になる。この康元帥も『三教搜神大全』に記事がある。

このように、清微系の法術においては、鄧・辛・畢などの雷部の諸天君に加え、温・関・馬・趙・殷などの多くの元帥が取り込まれていることが分かる。

卷四十の奏文には多くの神の名が記されているが、ここに見える神々が、恐らく清微系の法術で重視されている神将であると言えよう。

欵火律令大神 鄧天君
 正令大神青帝 辛天君
 行令大神暘谷 張天君
 神烈 苟・畢二雷君
 流金火鈴 劉天君
 捷疾焚炎 楊符使
 昌陽閃爍 呉・王二使者
 太玄左右 烏・塗二神君
 翻解冤結 顛使者（略）

主水主火 王・趙二將軍（略）
神虎 何・喬二大聖（略）
三元 五道大神
玉陽琰摩羅 朱將軍（略）
斗中 楊・耿二仙使
七元神君
掌急奏灌斗 張神君
玄枢 方符使
太一 王天君
枢靈 劉大神
総真 龔使者（略）
混元都統靈官 馬元帥
天医 許・趙二元帥
百薬 朱・李二仙官
攻炁院 馬・耿二元帥
小翻山 張賢聖
呂・丘・田・何・盧・路諸大功曹（略）
金輪執法 趙元帥
酆都馘魔 閔元帥
地祇上将 温元帥
急報無佞 康元帥
地司猛吏 殷元帥
巨天力士 孟元帥（略）

ここでは、鄧・辛・張・苟・畢などの天君を中心として、『無上黄籙大齋立成儀』の神位門に近い体系が示されている。ただ、雷部の天君以外では、閔・温・孟元帥などの、地祇法や酆都法系の神が目立っている。むろん、『清微神裂秘法』などで重視されている楊符使や顛使者の名も見えている。

卷四十六の「上清神烈飛捷五雷大法」の神将は、張亜・苟留吉・畢宗遠・

莊旻の各天君であり、卷四十八の「神捷五雷祈祷檢式」の奏文では、張巫・苟留吉・畢宗遠・殷郊・温瓊・関羽となっている。この上奏を受ける側は、概して玉皇上帝・玄天上帝（或いは北極四聖）・三官大帝・東嶽大帝といった高位の神となっている。

ただ、『清微元降大法』『清微神裂秘法』などと、『道法会元』におけるこれらの清微法の神体系を比較するに、やはりそこには若干の変化があるように思われる。

その傾向を概括的に捉えるならば、『道法会元』では、元來清微系の法術で重視されていた神将、すなわち鄧・辛・張・苟・畢などの天君のみならず、酆都法系の神、すなわち地祇温元帥や、酆都関元帥・孟元帥、また太歳殷元帥などの元帥神を加えていることが挙げられる。すなわち、この法術が書かれた時点では、多くの系統の法術の融合がさらに進んでいるものと考えられる。

酆都系の法術については、先に白玉蟾が「いにしえは無し」と断定していたように、新しい、しかも民間系の法術であったと推察される。ただ『道法会元』の後半部には酆都系の法術と思われるものも多く収録されている。恐らく、元から明初にかけての清微派は、こういった民間出自の法術も取り入れた結果、このような雑然とした神体系に変化していったのではないかと思われる。酆都法と地祇法の関係は若干不明な点があるが、温元帥が東嶽大帝配下の武将であることなどを考えると、酆都、すなわち地獄と深い関連があるものと考えられる。横手裕氏の指摘によれば、地祇法はまた「小酆都」と呼ばれ、また酆都派は別名「酆嶽」派とも称されることがあった⁸⁷⁾。この「酆嶽」の「嶽」は、五嶽或いは東嶽大帝に関連するものである可能性もある。いずれにしろ、これらの法術は冥界に関係するものであった。温元帥・関元帥・孟元帥などは、本来は元帥神の中でも、冥界神としての役割を強く有するものであったのである。この点は、雷部の鄧・辛・張天君などとは性格を異にする。むしろ後世では、このような性格の差異の意識は薄れていく。

もっとも、『道法会元』には性格を異にする様々な資料が混在していると思われ、その傾向も、実際には単純に論じることはできない。例えば、卷

五十から卷六十四までは、五雷法に関連する記載が中心となっており、ここに登場する神々の体系は、神霄法の系統を思わせるものである。例えば、卷五十五の奏文などに登場する神将は、苟・畢・鄧・辛・張の各天君と、王・呉の二使者のみ、その他の奏文でも、苟・畢二天君と劉天君と天丁力士、またこれに朱將軍などが加わるのみである。

卷五十六には、「雷霆神位」という神々の一覧表があるが、ここで示される雷神も、そのほとんどは伝統的な雷部の神々である。特に卷六十一から卷六十四を占める「高上神霄玉枢斬勘五雷大法」は、王文卿の序文を有するもので、後世の編集があるとはいえ、恐らく古く神霄派の神体系を示すものであろう。そこには次のような神将の名が見える。

将班

无上玄皇至尊九天雷首欵火律令大仙都天元帥煙都炎雲帝君大忠大孝

火律令大神 鄧伯温

掌雷霆火光霹靂銀牙耀目提点三界鉄筆演法大判官 辛漢臣

太乙捷兵火雷報応使者 張元伯

総撰大将都雷 程曼卿 (略)

雷公 江赫冲 (略)

電母 秀文英 (略)

風伯 方道彰 (略)

雨師 陳華夫

そしてこの後にも五雷・十二功曹などの神が見えるが、あまり酆都系の神の名は見えないようである。先にも見たとおり、神霄派の經典においては、ほとんど温・関・馬・趙などの元帥神の名が見えなかった。この王文卿作と思われる「高上神霄玉枢斬勘五雷大法」が、それらの經典と同じ傾向を有するのは、ある意味では当然と言えよう。

卷六十五の「三炁雷霆神位」においても夥しい数の神将の名が記されているが、ここにも元帥神の名は少なく、やや古い神体系が記されていることが

分かる。ここでは「玉枢院」の神として、揚雄と陶弘景の名が見えている。なお、この神霄系と思われる部分では、陀羅尼に類似した呪文が使われることが非常に少ない。

これらのことから、『道法会元』巻四十九までと、それ以降の巻五十から巻六十五まででは、神体系から見てもかなり内容に差があることが分かる。或いは、本来巻五十以降は別の經典であったものを、そのまま取り込んだ可能性も高い。その性格から言えば、巻五十から六十五までは、恐らくその法術はほとんど神霄系のものである。『道法会元』の編纂を行った過程で、清微派が自分らの經典類の後ろにあたる部分に挿入したか、或いは、もともと神霄派の經典があったところに、清微派の經典を前に付加したものは判然としない。ただ、巻四十九までが清微派を中心として編集されたものであり、巻五十から巻六十五までの經典より、時代的に遅れるものであることは間違いなからう。また清微派は、このような作業によって神霄派からの連続性を誇示しているものと推察される。

『道法会元』の巻六十六からは、主として雷法の理論面に関する記事が多くなる。巻六十七の「雷霆玄論」や王文卿の「雷説」、巻七十の「玄珠歌」などは重要な論説であるが、この部分は神体系についてはあまり記述が無い。またこの部分においても、陀羅尼系の呪文が少ないことが看取できる。

巻七十五「天書雷篆下」に含まれる奏文に見える神は、三清・玉帝・普化天尊・紫微大帝・天罡大聖・三官大帝・北極四聖など、非常にオーソドックスな体系である。ここで神将として登場するのは、鄧天君・辛天君・張天君・劉天君・閻元帥・竈元帥・任元帥・苟元帥・畢元帥などである。

『道法会元』の巻八十からは、一転してまた天君や元帥ごとの法術が多くなる。

巻八十は「欵火律令鄧天君大法」であり、その題名の通り、主帥となるのは鄧天君（鄧伯温）である。この法術は、「領籍上仙披雲楊耕常伝授」とある。楊耕常は、名を楊燮といい、福建延平の人。劉浩然・許志高の法術を受け継いだとされる⁸⁸⁾。ここで鄧天君は「赤髮金冠、三目青面」「背に肉翅あり」「手足みな五爪あり」とあるように、典型的な雷公の姿をしている。なお、いず

れの經典でも雷部の主神とされる鄧天君については、何故か『三教搜神大全』に独立の項目が見えない。

卷八十一は「負風猛吏辛天君大法」である。この法は「括蒼鶴溪処然居士潘松年伝授」とある。辛天君（辛漢臣）は「牛耳幘頭、朱髮鉄面銀牙」とされる。配下の将兵には、蛮雷使者が配されるが、それは「馬鬱林・郭元京・方仲高・鄧拱辰・田元宗」である。これらの神々の名は、『清微元降大法』にも見えている。卷八十二は「先天一炁火雷張使者祈祷大法」である。張使者を中心とし、やはり蛮雷使者などを配下に置く。これは伝授者の名が無い。

『道法会元』の卷八十三から八十六までは「先天雷晶隠書」となっている。これは恐らく、単独の一つの經典として独立していたものと考えられる。李遠国氏の指摘によれば、この經典は鄒鉄壁を宗師として伝授されたもので、前の「先天一炁火雷張使者祈祷大法」とも関連があるとされる⁸⁹⁾。

「先天雷晶隠書」には様々な記事が含まれるが、まず主法としては、長生大帝と摩利支天がおり、師派においては、汪守真・王文卿・白玉蟾といった祖師たちが並ぶ。神将としては、鄧天君・辛天君・張天君や、その配下として馬鬱林・郭元京・方仲高・鄧拱辰・田元宗などがある。ただ、ここでは張天君は、張珏・張雲・張亜の正副三将があるとされる。

卷八十から卷八十六までの幾つかの經典は、恐らく南宋期に由来するものが多いと考えられ、神体系も古いものをよく残している。ただ「先天雷晶隠書」の後半部、卷八十六のところには、奏文に示される神々の中には、「王元帥・殷元帥・朱將軍・趙元帥・関元帥・温元帥」があり、或いは後代の記事の補入があるかとも疑われる。

卷九十「先天一炁雷法」、及び卷九十一「雷霆六乙天喜使者祈祷大法」、そして卷九十二「先天一天喜使者大法」は、卷八十二の「先天一炁火雷張使者祈祷大法」と同様、張天君が中心となった法術である。

卷九十三の「雷霆三要一炁火雷使者法」では、鄧・辛・張の三天君の前に、「天罡大聖主雷真君馬自奴」及び「河魁大聖節度真君董万春」の名が見える。天罡大聖の姿は特異で、「披紅髮紅面、三目」「跣足に火車を踏む」とあり、

また河魁大聖も、「首に十二の髑髏を下げ」「足に水輪を踏む」となっている。後世、火輪を踏むのは哪吒太子のみが強調されるが、『道法会元』における神将の多くは、火輪・水輪・風輪・雷輪など様々な「輪」を踏む者が多い。これらの形象は、恐らく密教の明王の影響を受けているものと考えられる。なお、これら巻九十四から巻九十七までの諸法は、多くは張天君を中心とするものである。巻九十八の「九天碧潭雷禱雨大法」では、鄧・辛・張の三天君に加え、陶天君の名が見えている。陶天君は「四翅龍爪」といった姿で示される。巻九十九から巻百三までは、五雷法に関するものが多い。巻百四から百八までの「高上景霄三五混合都天大雷琅書」では、再び雷部の神々の位階表や、様々な符が示される。

『道法会元』巻百九から百十までの「混沌玄書」「混沌玄書大法」はいささか法術系統を異にするようである。神将は星神が多いが、その神体系についてはよく分からない面がある。巻百十一から百十三までの「帝令宝珠五雷祈禱法」は、正一派の張宗演が伝授したものである⁹⁰。この法術は、若干他の五雷法とは異なる性格を持つものと考えられる。巻百十四から百二十までの「太極都雷隱書」においては、様々な神が見えるものの、やはり神将の中心となるのは鄧・辛・張などの天君である。

『道法会元』は、巻百二十一の「南宮火府烏陽雷師秘法」からは、雷法としつつも、若干その性格が変わっていくと考えられる。「南宮火府烏陽雷師秘法」には次のような神将が見える。これを一連の「南宮火府」系統の法術と見ても問題は無いだろう。

主法

祖師烏陽雷師 吳真君

将班

南宮火府赤炎洞主烏陽雷師流金火鈴上将 吳元帥明達（略）

上部火輪神将 宋元帥無忌（略）

中部火輪神将 劉元帥炎真（略）

下部火輪神将 劉元帥択先（略）

流金火鈴大将 楊元帥昌孝（略）
 軍師奴利趙侯 黒犬四聖使者（略）
 大猪頭使者 劉居安（略）

このうち、一部の神は『無上黄籙大齋立成儀』にも記載があるが、その性格についてはよく分からない部分が多い。卷百二十二・百二十三の「太上三五邵陽鉄面火車五雷大法」も、辛天君の名はあるものの、その他は火車大将軍の「閻不斬・衛貞・任運力・邵陽公弼・鄭徹靈」などの火府の神が中心となる。但しここに見える「謝仙火」は、恐らく『三教搜神大全』に見える謝天君に該当するかと思われる。また宋元帥は、火部の神として重要な存在である。卷百二十三の「五嶽神位」には、五嶽の判官として、「銀牙猛吏辛漢臣」や「殺鬼大将軍馬勝」などの名も見える。

卷百二十五「九州社令蛮雷大法」、卷百二十六「九州社令雷法」、卷百二十七「九州社令陽雷大法」、卷百二十八「九州社令陽雷祈祷檢式」は一連の「九州社令」系の法術である。これは万鼎新を祖師とする派が伝授したとされる⁹¹⁾。その九州とは、例えば『上清靈宝大法』などの記載によれば、「冀州・兗州・青州・徐州・梁州・揚州・荊州・予州・雍州」の九つを指す。社令の神は、城隍神や土地神と同じような職責であると考えられる。「九州社令蛮雷大法」では、その主法を許遜とし、これを非常に重視する。神将の筆頭にいるのは、「社令陽雷総管康克」「社令除雷総管劉徳」「九州社令擊剥使者呂魁」とある。すなわち康・劉・呂の三元帥である。卷百二十八の「九州社令陽雷祈祷檢式」では、これらの諸将と温・関・馬・趙などの元帥を並べて記す。

雷首 鄧燮
 霆首 辛漢臣
 火雷 張珏
 雷公 江赫冲
 電母 秀文英

風伯 方道彰

雨師 陳華夫

雲吏 郭士秀

五方万雷使者 馬鬱林・郭元京・方仲高・鄧拱辰・田元宗

社令 楊・孫・洪・朱・馬

洞神 龐靈・劉通

神烈 苟俊・畢解

靈官 馬勝

白蛇 馬冲

玄壇 趙朗

黒虎大神 皮明

馘魔 関羽

地祇 温瓊

社令 康堯・劉徳・呂魁

『道法会元』には、このように奏文の中において、ある特定の法術に関わる神将に、さらに温・関・馬・趙などの元帥神を並べるパターンも多く見られる。

卷百三十の「北真水部飛火撃雷大法」は、玄天上帝を主法とする、水部の神に関わる法術である。この法術においては、歴史上の人物が多く神として挙げられている。

主法

教主北極佑聖真君玄天上帝

将班

雷霆水部都大判官 張渤（即祠山大帝也）

都部押発使者 鄧禹

水部擒龍大神 壬真一

水部搜龍大神 呉昌

水部驅龍大神	李順
水部鞭龍大神	王禹臣（略）
興風激浪使者	姜維
鼓風波濤使者	屈平
蒸雲蒸霧使者	趙太平
搏雲作水使者	樂毅
散雲生風使者	蓋勝之
能雨能晴使者	樊世仁
飛霜凝水使者	白起
剪水結雪使者	辛元礼
収陽降雨使者	孫勝
飛火擊雷使者	丁炳
掣電迅雷使者	呂宜
報事通達使者	龍武周

すなわち、屈原・樂毅・白起・鄧禹・姜維といった歴代の人物が玄天上帝の配下として、主に雲や雨や雪などを扱う神将として扱われている。さらに、祠山大帝張渤の名も見える。祠山大帝張渤については『三教搜神大全』にも記事がある。『道法会元』巻百三十一の「石匣水府起風雲致雨法」は、祠山大帝を中心とした降雨の法術となっている。

『道法会元』巻百三十二の「雷霆祈祷秘訣」では、「酆都行司閔元帥・張李牛頭・嶽主東嶽温元帥・東平威烈通天大元帥・張蕭黃劉王五大元帥」といった記載があり、また巻百三十三・百三十四の「太乙真雷霹靂大法」では、雷部の神々の一覧が記載されているが、ここでは「使者」とされている趙元帥などを除いてはあまり他の元帥の姿が見えない。巻百三十二から巻百四十五までは、「霹靂大法」と題した法術の系統が続くが、三清や玉帝など、神の体系としてはややオーソドックスなものが示される。なお、この奏文で示される「天枢院」は、単に天界の中心を指している場合が多い。

巻百四十六の「正一忠孝家書白捉五雷大法」は、「霹靂大法」とは異なっ

た系統のものであると考えられる。ここでは元帥が重要な役割を担っている。

主法

祖師玉帝御前伏魔上相李真君 漸字清叔（略）

聖位

雷門左伐魔使知南極天枢院事総轄雷霆都司一府二院三司事 苟元帥（略）

雷門右伐魔使知北極驅邪院事主管雷霆都司軍轄事 畢元帥（略）

四直使者 陳安・劉吉・孫徳・張京（略）

三十六雷七十二考召合属官将

紫虚鬱秀壇合壇官将

雷霆欵火律令 鄧天君

雷霆都督猛吏 辛天君

雷霆飛捷使者 張神君

正一魁神靈官 馬元帥

東嶽地祇上将 温元帥

酆都馘魔朗靈 関元帥（略）

ここでは、苟天君が南極天枢院を、畢天君が北極驅邪院を統轄し、その下に多くの元帥神が呼び出されることになっている。これは先に見た『海瓊白真人語録』巻一における白玉蟾の論とよく重なる部分がある。また苟・畢の二天君を特別に重視することは、『清微神裂秘法』などの清微系の經典の考え方に近い。ここで主法とされている李清叔は、南宋期に神霄派の一派を形成した者である⁹²⁾。この「正一忠孝家書白捉五雷大法」はその法術の系統を伝えるものであるが、恐らくは李清叔当時のままではなく、後代に追加された記事があるものと考えられる。

卷百四十七から百五十三までの「洞玄玉枢雷霆大法」では、再び「雷霆大法」と題する。冒頭にこの法術が、白玉蟾に由来するものであることが示さ

れる。但し、李遠国氏の指摘によれば、これは元の時代に白玉蟾の系統を継ぐ者たちによって書かれたものであるとされる⁹³⁾。この法術の中で挙げられている神将は、鄧天君・劉天君・張天君・寧天君・任天君・謝天君・朱天君・馬使者・郭使者・方使者・鄧使者・田使者である。伝統的な雷部の神々が中心になっているが、『三教搜神大全』に見える謝天君や朱天君の名が、鄧天君らとともに記されていることは非常に興味深い。

10. 『道法会元』における元帥（二）

——神霄系諸派及び天心・地祇・酆都系など

『道法会元』巻百五十四から巻百九十までの「混元六天妙道一炁如意大法」「上清天蓬伏魔大法」「混元飛捉四聖伏魔大法」「上清童初五元素府玉冊」「上清五元玉冊九靈飛歩章奏秘法」は、恐らく天心法系統の法術が中心となったものである。ここからそれまで中心であった清微系の法術とは明らかに異なる性格の資料が多くなる。

まず巻百五十四と百五十五の「混元六天妙道一炁如意大法」では、路大安・雷時中などの祖師を主法とし、その法術の中心に据えている。雷時中は天心法を駆使したことで知られた道士である⁹⁴⁾。この「混元六天妙道一炁如意大法」における神将は次の通りである。

主壇大都督青帝天君 辛漢臣
副壇都総管炎帝天君 鄧伯温
混元都総轄靈官元帥 馬勝
雷霆飛捷報応使者 張元伯
東方飛雲激電神王蛮雷使 馬鬱林
南方飛雲激電神王蛮雷使 郭元京
西方飛雲激電神王蛮雷使 方仲高
北方飛雲激電神王蛮雷使 鄧拱辰
中央飛雲激電神王蛮雷使 田元宗
雷公 江赫冲

電母 秀文英
 風伯 方道彰
 雨師 陳華夫
 雷府管打不信道法大將軍 朱彥明
 雷門忠孝查伐魔使 苟翌冲
 雷門忠孝右伐魔使 畢山則
 八卦洞神天寃正將 龐靈
 八卦洞神地臯副將 劉通
 混元行神布炁 馬居仁・耿居一
 天医符炁藥針灸砭六職治病仙官
 大威德神通最上滅魔顯法小翻山 張賢聖
 布炁功曹 閻丘积・張大用・祝清・孫達・劉定光・張元毅・田輝・
 王元・趙欽・張明遠
 捉縛枷梏四功曹 何纂・何燾・何清・何淵
 八卦天医主帥 趙邦英
 八卦天医副帥 許仙英
 直日五雷 田文仲・崔亜文・劉晏・陶公濟・高刁
 天医百藥退病 李紳・朱子榮

この法術では、奏文の中では玄天上帝を主法とする。蛮雷使者や雷公・電母などを重視することは、神霄・清微系と変わらないが、ここでは「天医院」を非常に重視しているのが特徴的である。卷百五十五においては、辛天君や馬元帥の他、「十大功曹」や「十大太保」などの配下の将も重視している。十大太保は、ここでは「温玉・李真・鉄勝・劉琦・姚正・張蘊・康応・岳勝・孟雲・韋彦」の各神将であることになっている。

『道法会元』の卷百五十六から百七十までを占める「上清天蓬伏魔大法」「混元飛捉四聖伏魔大法」においては、先に見た『太上助国救民総真秘要』『上清天心正法』『上清北極天心正法』などの天心系の經典と同様に、北極驅邪院と四聖・天罡大聖、及びその配下の三十六将などを重視する。

「上清天蓬伏魔大法」巻百六十二の符などで重視するのは、飛鷹大将や、走犬大将などの他、唐・葛・周の天門三將軍などがある。また同巻百六十四の北極驅邪院に対する奏文においては、北極驅邪院の天蓬・天猷・黒煞・真武の四聖などの神将が重視されている。そのため、ここで言う「四大元帥」とは、天蓬・天猷・黒煞・真武であり、温・関・馬・趙ではない。このような神体系は、その前に収録される「混元六天妙道一炁如意大法」とも性格を異にしており、恐らくはより古い神体系をそのまま残しているのではないかと推察される。ただ、巻百六十七の符など一部の記載には、殷元帥や趙元帥などの元帥神の名が見える。この部分には、真武を「玄天上帝」と記す場合もあり、後の記事の追補があるものと思われる。

巻百六十九・百七十の「混元飛捉四聖伏魔大法」では、北極四聖を中心として、「風・雷・水・火・四大神王」や「崔・盧・鄧・竇四大天丁神将」「温・李・呉・劉四大通天副将」などが見られ、ここで崔・盧・鄧・竇の四将を北極驅邪院の配下とすることは、先にみた白玉蟾の『海瓊白真人語録』における指摘と一致する。巻百八十一の「上清五元玉冊九靈飛歩章奏秘法」には、神々の一覧が採録されているが、ここに見える神も、唐・葛・周の三將軍などオーソドックスなものが多い。

『道法会元』の巻百八十八から巻百九十四までは、「太乙火府五雷大法」とそれに関連する法術によって占められる。これは劉浩然・許志高などの祖師が伝えた「太乙雷法」系統の法術である⁹⁵⁾。先に見た「南宮火府」と関連があるかと思われる。巻百八十八の序文には、宋咸淳年間の記載がある。ここで示される火府の神将を見るに、清微や天心系ともやや異なった神体系を保持していると考えられる。

火府主将威光掌令総監大神 丘青（略）
 副将震雷霹靂行令大神 王成之（略）
 散雲飛霧掌令大神 陳一言（略）
 運風变化青雷大神 李徳周（略）
 誅魔殺鬼讖伐大神 孔明輝（略）

- 火雷伐惡大神 崔実 (略)
 水雷洞耀誅伐大神 周明静 (略)
 電光普照飛火大神 紀茂卿 (略)
 驅雷致雨黑雷大神 劉道明 (略)
 飛雷急捉主律令大神 林康 (略)
 玄省直符驅雷大神 白伸 (略)
 三天持奏使者 謝祐 (略)
 東方雷公 朱靖 (略)
 西方雷神 劉漠祥 (略)
 南方雷神 朱德茂 (略)
 北方雷神 張未公 (略)
 中央雷公 楊元昇 (略)
 雷公大神 孟勝 (略)
 雷母大神 黃法彰 (略)
 風伯大神 馬雀 (略)
 雨師大神 陳元慶 (略)
 移雲掩日四丁大神 丁文広・丁文義・丁文通・丁文瑩 (略)
 開壇聽令四大神将 高刀 (略)・陶嗣 (略)・崔亮 (略)・趙公明 (略)

ここに見える雷神や風伯・雨師などの神の名は、先に見た清微法や天心法系統のものとは異なるものである。例えば、「混元六天妙道一炁如意大法」においては、「雷公江赫冲・電母秀文英・風伯方道彰・雨師陳華夫」であり、これは他の資料にも共通することが多いが、ここではそれぞれ「雷公孟勝・電母黃法彰・風伯馬雀・雨師陳元慶」となっている。またここで主法となる丘青・王成之・陳一言といった神将も、後代の、特に民間の資料ではあまり見られない。この中では、僅かに趙元帥が開壇の神将として登場している。卷百九十四の「太乙火府五雷大法行移」に、「祖師中天天枢相伏魔許真君」とあるが、この許真君とは許伏魔、許志高のことである。ここでも、丘・王・孔・林・謝・白の各神将が中心となっている。

『道法会元』巻百九十五から百九十七までは、「混元一炁八卦洞神天医五雷大法」「九清太皇府天医八卦洞神五雷大法」の「八卦洞神」雷法系統の法術が採録されている。ここで重視される神将は、龐・劉・陶の三天君である。

主法

雷祖主法妙道上帝

神将

主帥 龐靈（略）

副帥 劉通（略）

主壇 陶公濟（略）

八卦大神

乾宮捉鬼天丁 張宏

坎宮縛鬼天丁 黄甫

艮宮枷鬼天丁 丘志

震宮拷鬼天丁 李自明

巽宮斬鬼天丁 趙逢

離宮燒鬼天丁 徐永

坤宮冰鬼天丁 呂清

兌宮压鬼天丁 余通

龐天君と劉天君については、『三教搜神大全』に記事がある。李遠国氏の指摘によれば、この「八卦洞神」雷法を奉じたのは張元真を宗師とする一派であり、三十代張天師の張虚靖を祖師とするという。この法術の巻百九十六の後序には、張継先の署名があるが、これは後人の手になるものであろう⁹⁶⁾。ここで示される他の八卦神については、他の資料には詳しい記載が無い。ただ、先に見た巻百五十四の「混元六天妙道一炁如意大法」においては、龐天君と劉天君がやはり「八卦洞神」の将となっていた。またここでは、「天医院」が非常に重視されている。

巻百九十八「神霄金火天丁大法」から巻二百六「金火天丁召孤儀」までは、

「金火天丁」系統の法術となっている。卷百九十八の序は陳道一の手によるもので、また卷百九十九においては、林靈素の撰と称する「金火天丁神霄三炁火鈴歌」を収録する⁹⁷⁾。そのため、この法術は林靈素の伝統を直接継ぐものと見なされ、これを非常に重視する向きもある。神将としては、ここで重視されているのは、「天丁」である張天君である。さらに配下の将として「火鈴童子」を配する。いずれも張姓である。またここでは、元聖天尊・救苦天尊・度命天尊の三天尊を主神とする。

卷二百七「太極葛仙翁施食法」と二百八「太極玉陽神鍊大法」では、葛仙翁を重視するが、神将についてはそれほど目立つ記載が無い。卷二百九「玉陽祭鍊文檢品」では、様々な奏文を採録するが、三官大帝に対するもの、北陰酆都玄天大帝に対するもの、水府扶桑大帝に対するもの、東岳大帝に対するものなどがある。さらに地祇に対するものがあり、ここでは温元帥とその配下の将が重視されている。卷二百十の「丹陽祭鍊内旨序」は王玄真の序文があり、また末尾には元末の道士張雨の署名がある⁹⁸⁾。

『道法会元』卷二百十一は、「天罡生煞大法」であり、天罡大聖を中心にした法術となっている。卷二百十二の「中皇総制飛星活曜天罡大法」は、「運用秘訣」を王文卿の述とする。主となるのは天罡大聖であるが、配下の神将に、「五方大神王」や「摩尼大力火輪金剛・万丈鳩羅大力火輪神将・乾羅飛天火車元帥・地軸希盧火馬猛将」などの名が見える。卷二百十三は「広霊宣化陳將軍秘法」で、陳元帥を主とした法術である。またこれには、劉元帥を主とした「神霄黒虎劉元帥秘法」が付されている。

『道法会元』卷二百十四の「玉音乾元丹天雷法」は、『道法会元』の中でも特異な性格を持つ法術であり、密教系呪術の影響が強く感じられるものである。まず「教主梵炁天皇天父大帝」は「人首蛇身にて紅髮金眼」であり、「法主帝釈阿伽地皇天母大帝」は「人首蛇身にて緑髮銀眼」であり、「法主雷祖大帝斗母紫光金尊」は「三頭六臂にて両手に日月を捧げ持ち、また別の両手には弓箭を持ち、また別の両手には降魔鈴杵を持つ」という形象である。また斗母は七頭の猪の牽く輦に乗る⁹⁹⁾。そして神将の「玉梵尊天嘍囉王」と「妙梵尊天伽囉王」はともに「西蕃人」であるとされ、これが鄧天君・辛天君・

張使者と併置されている。卷二百十五の「元皇月孛秘法」は月孛雷君を、卷二百十六の「九天玄女竈告秘法」は九天玄女をそれぞれ中心とした法術である。ただこれらの諸法と元帥神の関連は希薄である。

卷二百十七から卷二百十八の「紫庭追伐補斷大法」では、天心系法術の色を強く打ち出したものとなる。

主法

北極法主天蓬都元帥蒼天上帝

華蓋祖師人天教主孚佑顯靈 浮丘真君

華蓋祖師妙道教主正佑妙靈 王仙真君

華蓋祖師克誠教主顯佑威靈 郭仙真君

主帥

紫庭追風神王天皇主法四目老翁 陳元帥（略）

紫庭追雷神神王天皇主法高刁北翁 唐元帥（略）

紫庭追火神王天皇主法素臬三神 薛元帥（略）

紫庭追水神王天皇主法長顛巨獸 宋元帥（略）

すなわち、華蓋山の三真君に、陳・唐・薛・宋の各元帥を加えたものとなっている。副将には、趙元帥や馬元帥などの名も見える。法術では北極驅邪院と上清天枢院を重視する。

卷二百十九「神霄斷瘟大法」と卷二百二十「神霄遣瘟送船儀」及び卷二百二十一「神霄遣瘟治病訣法」では、治瘟の神将たちがクローズアップされる。ここで重視されているのは、鉄・陳・姚・徐の各元帥である。ただ「神霄遣瘟送船儀」では、太歳殷元帥と副将の王・蔣二将などを主とする。

『道法会元』卷二百二十二「正一吽神靈官火犀大仙考召秘法」から、卷二百二十六「正一靈官馬帥秘法」までは、すべて靈官馬元帥が中心となった法術が集められている。

「正一吽神靈官火犀大仙考召秘法」における馬元帥の姿は、火神であり、金槍・金磚を持ち、足に火輪を踏むというもので、これは『三教搜神大全』

や後の小説類に見えるものと一致する。また呪の中に「華光五通」という文句も見え、華光や五顯神との同一視もすでに行われていることが推察される。ただ馬元帥それ自体の由来については、例えば『三教搜神大全』や『南遊記』に見えるような詳しい故事は語られていない。配下の将としては、別の法術にも見えていた白蛇大将の馬充、それに温賛・王靖・席言・黄用の四将がある。卷二百十五「火犀大仙馬靈官大法」では、馬元帥を中心として、その他に陳・朱・蕭・鄭の各元帥を併記する。朱元帥は続く卷二百二十七の「太一火犀雷府朱將軍考附大法」で法術の主となっているが、陳・馬・朱の三元帥を火府の靈官としてひとまとめに扱うことも多い。卷二百二十九の「靈官陳馬朱三帥考召大法」から卷二百三十一「上清正一三景靈官秘法」までは、まさにこの陳・馬・朱の各靈官を中心とした法術である。

「太一火犀雷府朱將軍考附大法」の「雷輿序」によれば、朱元帥はもと殷の紂王の時代の官吏であったが、太華山に隠れ、天界の将となった。朱靈官は、天下の「正道を信ぜざる者を打つ」とされ、別に「打不信道法」の称がある。この法術は盧堃の一派が伝えたもので、また盧はこれを張虚靖から得たとする¹⁰⁰。盧堃は劉玉にこの法を伝えた。劉玉は先に見た「神霄金火天丁大法」の伝授にも関わっている。朱元帥については、『三教搜神大全』にも伝があるが、かなりその由来については異なっている。また朱元帥の名については、時に「朱彦」とし、時に「朱僧奇」とするなどして一致しない。

『道法会元』卷二百三十二「正一玄壇趙元帥秘法」から卷二百四十「正一玄壇元帥六陰草野舞袖雷法」までは、趙玄壇を中心とする法術である。「正一玄壇趙元帥秘法」の冒頭で、趙元帥について語られる。それによれば、趙元帥は名を朗、一名を昶、字は公明。終南山の人。秦の時に世を避けて山中に入って修養に努め、玉帝から元帥に封ぜられた。その姿は、虎に跨り、鉄の冠に鉄鞭を執るというものであった。初代天師張道陵が丹を鍊っていた時にこれを守護したという。また龍虎山の守護にも当たる。ここをもって「正一」の称があるようだ。その配下の将には、「八王猛将」がいる。その八名とは、呉宛・唐開・譚超・王賓・雷轟・龔狼・張彪・何魁である。また別に配下として二十八将・六毒大神・五路大神・八猖大神などがあるとされる。このう

ち二十八将については、鄧禹や呉漢など、全く後漢の光武帝の二十八将が充てられている。また実在の将であった白起と伍員などもその配下とする。

趙元帥については、『三教搜神大全』に記載があるが、その由来などにそれほど差異は見られない。また、この中で特筆すべきは卷二百三十四の「正一龍虎玄壇金輪執法如意秘法」であろう。この法術中では和合神や招財童子・進宝郎君などが呼び出され、完全に招財のための法術となっている。趙玄壇はむろん財神としての性格を強く持っているが、『道法会元』の中でかくもその機能が強調されることは珍しいと言ってよい。これも恐らく、この法術が民間系出自であることを示していよう。

卷二百四十一から卷二百四十三までは、「雷霆三五火車靈官王元帥秘法」であり、王靈官を中心とした法術になっている。『三教搜神大全』には王靈官と薩真人の故事が見えているが、この「雷霆三五火車靈官王元帥秘法」でも、その主法となるのは師にあたる薩守堅である。王元帥の姿は、「左手に火車を持ち、右手に金鞭を執る」というものであるが、ここでは有名な三眼ではないことになっている。王靈官の配下の将としては、陳元帥・丘元帥・畢元帥などがある。

『道法会元』卷二百四十四と二百四十五の「玉清靈宝無量度人上道」は、具体的な法術ではなく、理論的な面に関する叙述となっている。まず靈宝派の系譜を示し、また寧全真・林偉夫の伝を記し、様々な訣を提示する。この部分においては靈宝派の非常にオーソドックスな体系が示される。またこの部分には陀羅尼系の呪文はほとんど見られない。

卷二百四十六の「天心地司大法」と卷二百四十七「北帝地司殷元帥秘法」は、太歳殷元帥を中心とした法術である。殷元帥については『三教搜神大全』に伝があるが、その「殷の太子であった」という伝承はここでは見えない。ただ、その師とされる申真人については、この「天心地司大法」においてもその主法とされている。この法術の序文には、南宋咸淳年間の彭元泰の署名がある。その序には北帝神の勅により殷元帥が妖邪を退治したことを述べる。主法となっているのは、申霞と廖守真の両真人である¹⁰¹⁾。この法術では北帝神を重視することから、天心系統の性格を感じさせる。ただ他の天心系の

法術の記載とはやや齟齬する面もある。太歳神の配下には、「七十二候主将・二十四炁主将・金鐘黄鉞大将・黄旛豹尾大将」などがある。これらは太歳の部下らしく、時間に関係するものが多い。同じく殷元帥が主となった巻三十七の「上清武春烈雷大法」とも共通する点が若干存在する。巻二百四十八は「地部金官如意潘將軍秘法」である。この潘將軍は、或いは白玉蟾の言にあった潘元帥か。この法では、潘・許・鍾の三元帥が主となっている。

『道法会元』巻二百四十九から巻二百五十の「太上天壇玉格」は、神々の職種と規律について記す。次の巻二百五十一から巻二百五十二の「太上混洞赤文女詔書天律」においても、天界の規律についての記述がほとんどである。なお、ここでは天枢院と馭邪院の役割を非常に重視している。

巻二百五十三から巻二百五十六は地祇法系の法術であり、温元帥を中心とするものである。巻二百五十三の「地祇法」の序文には劉玉の署名がある。劉玉は先に見た「神霄金火天丁大法」や「太一火犀雷府朱將軍考附大法」の伝授にも関わるものである¹⁰²⁾。劉玉は地祇法を黄公瑾に伝えたとする。地祇法の後跋には黄公瑾の署名があり、南宋咸淳十年（一二七四）との記載がある。巻二百五十四「東嶽温太保考召秘法」によれば、温元帥は名を温瓊、東嶽大帝の部下である。温元帥の姿は、青面金眼の獍猛な様子であり、配下には、崔・盧・鄧・竇の四将がいるとされる。北極馭邪院の本来の神将である四将が、ここで温元帥の配下となっているのは興味深い。また、巻二百五十五の「地祇温元帥大法」では、その主法は張虚靖となっている。

『道法会元』巻二百五十七「東平張元帥秘法」と巻二百五十八「東平張元帥專司考召法」は、張元帥を中心とするものである。張元帥は、唐代の人で名は張巡。この法術で副帥となる許遠と共に『旧唐書』忠義伝に収録された人物である。またさらに、「東平張元帥專司考召法」で配下の神将とされる雷万春・南齊雲などもやはり忠義伝に記載がある。このほか、温・李・鉄・劉・楊・張・康・岳・孟・韋の十太保もその部下であるとされる。なおこの法でも主法は張虚靖であり、前の「地祇温元帥大法」との共通性を感じさせる。また張元帥の姿は、「青鬼面、朱髮」であり、狼牙棒を持つ姿で現され

る。ここで注意したいのは、狼牙棒を持つのは後世ではむしろ温元帥の特色であることだ。

卷二百五十九「地祇馘魔関元帥秘法」と卷二百六十「酆都朗霊関元帥秘法」は、それぞれ関元帥を中心とする法である。この「酆都朗霊関元帥秘法」においても、その主法となるのは張虚靖である。後でこれについては別途考察するが、張虚靖と関羽の関係は密接なものがあり、そもそも関羽が神として考えられるようになったのは、張虚靖が原因と言ってもよい。

関元帥の姿は、「重棗色面、鳳眼、三牙鬚、髻一尺八寸」であり、「大刀を持ち、赤兔馬に乗る」というものである。すなわち、後の関帝の形象とほぼ同じである。「地祇馘魔関元帥秘法」に付す「事実」には、張虚靖と関元帥の関係を記し、末尾には陳希微の署名がある。陳希微は『茅山志』卷十六によれば北宋徽宗の頃の人である¹⁰³⁾。関元帥の副将となるのは、「地祇馘魔関元帥秘法」によれば、「清源真君趙昊」及び「飛天八将」となっている。清源真君はまた「清源妙道真君」とも記される。すなわちこれは二郎神、すなわち「清源妙道真君趙昱」のことであると思われるが、これと「禁将趙旻」との関係がやや明確ではない。飛天八将は、先に見た白玉蟾の言にあった「八将」のことであると思われる。また関元帥の子である関平の名が見え、また後に関帝の従神として有名な周倉は、ここでは「周昌」と書かれる。或いはこれは漢初の臣である周昌を指すか。すると周倉自体が、周昌を来源とする神である可能性も考えられる。

ここで関元帥の法術に、「地祇法」と「酆都法」の両者が存在することは、恐らく両者がほとんど同類の系統に属するものであることを示唆するものと考えられる。そもそも、地祇温元帥・地祇張元帥・酆都関元帥が続いて配されること自体が、その近似性を示していよう。そもそも酆都系の神は冥界の神であり、「鬼」としての性格が強い。恐らくは民間出自の法だと思われ、また白玉蟾が「いにしえは無し」と称したように、神霄や天心系に比べて、やや新しい層に属する法術だと思われる。

これに続いて卷二百六十一「酆都車夏二帥秘法」も酆都系の法術となっている。ここで中心になる神将は車・夏の二元帥である。主法は北陰酆都玄天

大帝である。これは北極紫微大帝と同一視されている。車・夏元帥の配下の将としては、石使者・劉使者・鮑使者などがある。またこの法に続いて付される「酆都内台考召秘旨」では、孟元帥が中心となっている。

注意すべきは、『道法会元』では「北帝」といった場合、法術によって比定される神格が変わることである。それは「北帝煞鬼之法」の旧来の「北帝」である場合もあれば、北陰酆都大帝を指すか、また北極紫微大帝か、玄天上帝であることもある。しかもこれらは截然と分けることが難しく、この場合のように神格の概念が重なり合うことの方が多い。また、その冥界の主宰神としての特色は、時に東嶽大帝や十殿閻王とも重なることがある。

『道法会元』巻二百六十二から巻二百六十三までの「酆都考召大法」と、巻二百六十四「北陰酆都太玄制魔黒律収撰邪巫法」、それに巻二百六十五から巻二百六十六までの「北陰酆都太玄制魔黒律靈書」、及び巻二百六十七から二百六十八までの「泰玄酆都黒律儀格」は、すべて酆都系の法術で占められている。巻二百六十八は同時に『道法会元』の最後の巻でもある。

「酆都考召大法」においては、「北帝煞鬼之法」以来の酆都の六宮が示される。次に戴・韓・焦・馬・宗・関・烏・屠・車・夏などの神将が記されるが、いずれも冥界の将という形である。「酆都八将」はここにおいても強調されている。関元帥や馬元帥の地位はここではかなり低いようである。白玉蟾の言などから推察するに、どうもこの「酆都考召大法」の方が、酆都法のやや古い姿を伝えているように思える。

「北陰酆都太玄制魔黒律収撰邪巫法」は、盧埜の編、徐必大の注とされている。盧埜は先にも見た通り、劉玉の師であり、幾つかの法術の伝授に関わっている¹⁰⁴。ここではむしろ天蓬元帥が主となる。ここでは陀羅尼系の呪文がほとんど見られず、酆都法のより古い姿を保持しているものと思われる。「北陰酆都太玄制魔黒律靈書」は、「魏伯賢修、鄭知微序次」とされる。またさらに盧埜によって書かれている箇所がある。ここでは、新旧の要素が混じっており、そこでは若干神格の性格に相違が見られると考えられる。ただ中心になるのは、やはり北帝と北極四聖、それに八将などの些か古い層に属すと思われる神格である。

11. 『法海遺珠』に見える元帥神

『法海遺珠』¹⁰⁵⁾は、『道法会元』とほぼ同じ性格を持つ、様々な派の雷法を集大成した經典である。ただ全てで四十六巻と、『道法会元』に比してその分量は少ない。とはいえ、道教經典としてはかなり大部の經典に属する。

以下に、全四十六巻の各編と収録される法術について記す。

巻数	編名
1	神霄十字天經
2	洞玄秘旨
3/4	太乙火府秘法
5	太乙火府秘旨
6	三宮内旨
7/8	九天雷晶使者梵炁隱書機法
9	太極雷隱秘法
10	神霄上道
11	雷機玄秘
12	璇璣建壇祈告次序
13	玄靈默告秘文
14	告斗求長生法
15	奏伝混鍊法式
16	雷霆諸帥秘要
17	南院火獄大法
18	九天魁罡雲路追捉三陣大法
19	九天魁罡黃龍奪命秘法
20	召紫姑仙法
21	混合五雷内修
22	五雷総撰
23	鄧帥大神九變歎火符法
24	大洞飛捷五雷大法
25	五雷迭運妙法
26	策役社令玄秘

27	金闕先生家書秘文
28	總召蛮靈符秘
29	上元重明九斗陽茫火鈴符法
30	太歲秘法
31	九陽上將劉天君秘法
32	北帝四聖伏魔秘法
33	北帝御前小四聖秘法
34	紫微玉音召雷大法
34	雷門左右伐魔使苟畢二元帥法
35	太歲武春雷法
35	斗口魁神靈官秘法
35	十七字靈官秘法
36	神霄都督金輪執法趙元帥秘法
36	三天風火獨雷大法
36	雷電地祇秘法
37	紫霄護法五雷黑虎劉大神法
37	青玄地雷主令溫元帥變用秘法
37	斬勒飛捷火雷使者大法
38	雷霆辛都督秘法
38	天罡統首逐凶退土符法
39	酆都西台朗靈誡魔闕元帥秘法
40	六一飛捷秘法
40	先天一炁火雷使者秘法
41	無上混沌一炁天書
42	太上穰告心奏秘文
42	司命祈禳大法
43	太玄煞鬼闕帥大法
43	地祇溫帥大法
44	糾察地司殷帥大法
44	雷箭大法
45/46	紫宸玄書

その正確な編纂の時期は不明であるが、卷四十五の章舜烈の序には元至正年間の年号があり、恐らくはそれ以降、元末明初の成立であるとされる¹⁰⁶⁾。『法海遺珠』は『道法会元』と似た内容を持つものの、若干異なる部分もある。例えば卷十四では、法を司る師として、鍾離権や呂洞賓、それに白玉蟾などの名を挙げる。ここでは所謂南宗系の祖師たちと、雷法の神将が併置されている。恐らく『法海遺珠』ではかなり白玉蟾の法系を重んじているものと推察される。

以下では、『法海遺珠』の各法について、元帥神を中心として見てみたい。

まず『法海遺珠』の卷一「神霄十字天経」では、主として白玉蟾を挙げ、その神将には、劉天君を中心に、閻元帥・張天君・寧元帥・任元帥などがある。これは『道法会元』の卷七十五「天書雷篆下」に挙げられた人員とよく似ている。

卷三から卷五には「太乙火府秘法」「太乙火府秘旨」があり、すなわち「太乙火府」雷法の系統の法術となっている。主としては道德天尊・陳希夷・劉通玄などの真人が挙げられる。その神将は次の通り。

太乙火府主法都総管 李元君
 主法太乙都総 祝元君
 主将 丘青 副将 王成之
 雷神 陳一言 青雷 李徳周
 誠伐 孔明輝 火雷 崔実
 (略)

すなわち『道法会元』の卷百八十八から卷百九十四までの「太乙雷法」系統のものと、ほぼ同じ神将が見られる。

卷六の「三宮内旨」では、天蓬元帥と天罡大聖、そして辛天君が重視されている。卷七と卷八の「九天雷晶使者梵炁隱書機法」は祈雨の法を中心とする。卷九の「太極雷隱秘法」も同じような性格を持つ。ここでは普化天尊や張使者の名が見える。卷十「神霄上道」から卷十三「玄靈默告秘文」までは

かなりオーソドックスな符呪の法が見える。

卷十四の「告斗求長生法」では、先にも少しふれたように、その師法として、「太極真人王行真・伝道真君鍾離権・内輔真人鄭思遠・靈宝真君呂巖・通玄真人張果・清定真人白玉蟾」の名が見える。『法海遺珠』の一部に全真系の影響があることは、ここから顕著に見て取れる。

卷十五の「奏伝混鍊法式」では、奏文の中に多くの元帥神の名が見える。まず鄧天君・辛天君、それに謝天君などである。そして馬元帥・温元帥・趙元帥など、数多くの元帥の名を連ねる。ここでも、北極驅邪院と南極天枢院は対置されて置かれているものと考えられているようだ。

卷十七は「南院火嶽大法」は、宋元帥を主とする法である。

主将 宋元帥無忌（略）
 副将 許元帥汲
 五方追捉大将 趙元帥公明（略）
 弁邪大将 陳將軍
 燒鬼大将 劉將軍
 斬頭瀝血大将 龔將軍

すなわち、『道法会元』卷百二十一の「南宮火府」系統の神将と近い。

『法海遺珠』卷十八「九天魁罡雲路追捉三陣大法」では、「徐守忠・江巨源・翟世寧・趙子玉・朱雲・朱青」などの神将が見える。また卷十九「九天魁罡黄龍奪命秘法」では、「金子珏・宋無忌」などを主とする。卷二十は「召紫姑仙法」である。

卷二十三「鄧帥大神九變欵火符法」、卷二十四「大洞飛捷五雷大法」及び卷二十五「五雷迭運妙法」では、鄧天君・辛天君・劉天君と、それに五雷使者を重視する。主に雷部の天君が中心となるものである。

卷二十六「策役社令玄秘」では、次のように、雷部の天君と温元帥・関元帥などを併置する。

主壇八十一天欵火律令大神 鄧伯温

監壇太一捷疾直符使者 張元伯

監壇太一捷疾直符使者 許先定

総轄三界九州社令雷神主者 蔣沢

主帥九天雷声普化大神 宋光沢

副将東嶽主令司驅陰雷大将 関羽

九州社令雷神

揚州社令 鄒混

掌驅惡伐大将 温瓊

この法は、中に「九州社令」という記述が見えることから分かるように、「九州社令」系の法術である。よって『道法会元』巻百二十五から巻百二十八の、一連の「九州社令」系の神体系と酷似する。

『法海遺珠』巻二十七の「金闕先生家書秘文」は、北極四聖を重視する。しかし前半では、玄天上帝を強調する記載が目立つ。恐らく、元来は四聖中心の法術であったものが、後に玄帝の部分がクローズアップされるに至ったものであろう。ここではまた、唐・周・葛の三将軍も重視されている。

巻二十八「総召万霊符秘」に見えている「崔子文・史珪璋・羅輝・景耀」のうち、崔・史の両神将については、王氏『上清靈宝大法』の巻三十九に記載がある。この「総召万霊符秘」には辛天君や蔣使者の名も見える。『法海遺珠』巻二十九の「上元重明九斗陽茫火鈴符法」は、鄧天君を中心とする法である。

『法海遺珠』巻三十「太歳秘法」では、太歳殷元帥を重視する。巻三十一の「九陽上将劉天君秘法」では、劉天君を主帥に、閻・張・審・任の四大天君を副将に配する。

巻三十二は「北帝四聖伏魔秘法」で、天蓬・天猷・黒煞・玄武を主とする。元代の資料であるためか、「真武」ではなく、「玄武」と書かれることが多い。内容的には『道法会元』巻百六十九・百七十の「混元飛捉四聖伏魔大法」と共通する部分も多い。

『法海遺珠』卷三十三「北帝御前小四聖秘法」では、神将として、「無面目大將軍陳勝・瀝血大將軍吳広・擯撲大將軍炅容・元神大將軍耿温」の四将が重視されている。すなわち、秦末の陳勝・吳広が神将とされており、北極紫微大帝の配下となっている。卷三十二の後半では、朱元帥や秦元帥といった神将の名が見える。

卷三十四は「紫微玉音召雷大法」と「雷門左右伐魔使苟畢二元帥法」からなる。前半の「召雷大法」の主法は次の通りである。

主法

祖師西河救苦妙道一元無上薩君真人

将班

雷霆欵火律令大神 鄧天君 名燮

雷霆猛吏都督大神 辛天君 名志

副帥南方火鈴大将 朱元帥 名無忌

副帥北帝曠野大神 寶元帥 名勝

すなわち、薩真人を中心に、鄧・辛・宋・寶の雷部元帥が神将となる。また後半部では、同じく雷部の苟・畢の二元帥が中心となっている。『道法会元』の「雷霆大法」などの系列に近いものか。

『法海遺珠』卷三十五は、「太歳武春雷法」「斗口魁神靈官秘法」「十七字靈官秘法」からなる。前半の「太歳武春雷法」は太歳殷元帥を主とし、「斗口魁神靈官秘法」「十七字靈官秘法」では馬元帥を中心とする。卷三十六は「神霄都督金輪執法趙元帥秘法」「雷電地祇秘法」からなり、それぞれ趙元帥・温元帥を主とする。

卷三十七は「紫霄護法五雷黒虎劉大神法」「青玄地雷主令温元帥変用秘法」「斬勘承旨飛捷火雷使者大法」からなる。それぞれ劉元帥・温元帥・張使者を主とする。「紫霄護法五雷黒虎劉大神法」主法としては玄天上帝が当てられている。またここでの温元帥は鞭を手に執る。卷三十八は、「雷霆辛都督秘法」「天罡統首遂凶退土符法」からなる。前半では辛天君が、後半では趙

元帥が主となっている。

『法海遺珠』卷三十九「酆都西台朗靈馘魔関元帥秘法」では、関元帥が法術の中心となる。配下の将としては、「魏・焦・魯・曾・馬」の諸将と「韋・劉・王・孟・車・夏・劣・桑」の八煞大将の名が見える。『道法会元』卷二百五十九「地祇馘魔関元帥秘法」と卷二百六十「酆都朗靈関元帥秘法」などと共通する面は多い。いずれにせよ、地祇酆都系の法術であると考えられる。

『法海遺珠』卷四十は「六一飛捷秘法」であり、張天君と六丁使者を中心とする。ここでは九天玄女神が重視されている。

卷四十一「無上混沌一炁天書」と卷四十二「太上稟告心奏秘文」では、これまでとやや毛色の異なる、雷法と内丹・符呪を融合させた法術が展開されている。

卷四十三の前半は、「太玄煞鬼関帥秘法」であり、酆都馘魔関元帥を中心とする。後半は「地祇温帥秘法」で、地祇温元帥を神将とする。ここでは、天師張虚靖を師とする。ここで温元帥の部下とされている将は、「鉄・畢・黒・方・劉・張・趙・史・周」の各元帥で、所謂十太保とは若干人員が異なっている。卷四十四「糾察地司殷帥大法」では、太歳殷元帥を主とし、その配下としては、「蔣使者・盧明・李仲文・関隆・陳橐畿・宮文王・張宗義・西門豹・呉正文・劉忠・宋文行・韓宝」などの将が挙げられている。

『法海遺珠』卷四十五・卷四十六の「紫宸玄書」では、恐らく章舜烈の派独自の法術が展開されていると思われ、ここに見える神将は些か『道法会元』に見えるものとは、体系が異なっている。法系として、「祖師董飛霞・一代方真人・二代嚴道隆・三代郭応岐・四代章元長・五代章舜烈」という系譜が示され、神将としては、「趙光淵・毛尾・童立羊・熊世勝・鄧行文・李史近」などの元帥が挙げられている。

総じて『法海遺珠』の法術は、『道法会元』に比して記載が簡略な傾向がある。またその神体系は、重なる部分も多い一方、雷部の元帥や地祇酆都系の神が強くなっているように思われる。また一部に全真系の神体系が取り入れられている点は注意すべき点であろう。

12. その他の元帥に関わる経典について

『道法会元』や『法海遺珠』以外にも、元帥神に関連する経典は『道蔵』の中に幾つか存在する。

まず、洞真部に収録する『太乙火府奏告祈祷儀』¹⁰⁷⁾及び『清微玄枢奏告儀』¹⁰⁸⁾である。『太乙火府奏告祈祷儀』は北極四将を中心にしたややオーソドックスなものであるが、『清微玄枢奏告儀』には王元帥・龔元帥・劉元帥・楊使者・耿使者などの神将の名が見える。

正一部『鄧天君玄靈八門応報内旨』¹⁰⁹⁾は、鄧天君に関連するものであるが、書中で温元帥に言及する。洞神部の『地祇上将温太保伝』¹¹⁰⁾は、温元帥の伝である。これは黄公瑾の撰になるもので、また『温太保伝補遺』が含まれる。

『道法会元』に類すると思われるものの、やや毛色の異なる経典に『貫斗忠孝五雷武侯秘法』¹¹¹⁾がある。ここは諸葛孔明を主法とし、関羽・張飛・馬超・黄忠・趙雲といった三国物語で著名な武将たちを神将として扱う。しかしその中身はほとんど雷法の記述で占められている。恐らく元代に発展した三国物語の影響のもとに作られたものであろう。

13. 道教における元帥神信仰の発展

以上、『三教搜神大全』に記載のある元帥神を中心に、『道法会元』やその他の経典の内容について、やや詳しく検討した。南宋から元において発展してきた道教の神将については、様々な流派において造作された結果、その数は膨大なものとなり、『三教搜神大全』に反映されているものはそのごく一部に過ぎないと理解すべきであろう。そして、神霄派など、初期の雷法においては、必ずしもすべての元帥神が重視されているとは言えず、特に温元帥や関元帥などは、やや遅れて元帥神の列に参入したものであると考えられる。ただ、現在の道教の儀礼文書や、民間の法術儀礼においては、冒頭に見たようにかなりの数の元帥の名が見える。現在使用されている儀礼書の多くは、『道法会元』以後の流れを引き継ぐものであることは、まず間違いないであろう。

これは、『道法会元』と『法海遺珠』とを、両部の『上清靈宝大法』や、『靈宝玉鑑』¹¹²⁾などの南宋の儀礼文献と比較すれば、その神体系の違いはより明確になるであろう。例えば『靈宝玉鑑』などは、その法術や靈符における記述は『道法会元』『法海遺珠』と著しく似た面があり、明らかに雷法の影響を受けている。しかし、そこに見える神將に注意してみると、それは五道大神であったり、六甲六丁神であったり、唐・葛・周の三將軍であったりする。そもそも「元帥」という称号を持つ神自体が少ない。但し趙元帥の名は見えている。

南宋期の道教の主流派においては、恐らく元帥神はまだあまり受け入れられていないものと考えられる。だが、白玉蟾が言及しているように、南宋においては様々な道派によって考え出された神將が、道教の神列に参入していく過程が進行中でもあった。

また『道法会元』の地祇法や酆都法にしばしば南宋咸淳年間との記載があるのは、捏造とは考えられず、当時の記録をそのまま採録したものであろう。よってこの時期には、多くの雷法を継ぐ道士たちによって元帥神が造作されていたものと推察される。ただ咸淳といえ、すでに南宋も末であり、ほとんど元の世祖の治世と重なる時期であることは注意すべきであろう。

その『道法会元』も、成立時期を異にする資料が混在しており、下手をすると同じ巻の中でも矛盾する神体系が示される。ただ元帥神は多くの法術で、すでに中心的な存在となっている。

あえて『道法会元』における元帥神などを、極めて単純化してその傾向を示すならば、次の通りになると思われる。

まず「上清天蓬伏魔大法」や「混元飛捉四聖伏魔大法」などでは北極驅邪院の四聖と天罡大聖などを中心とした体系となっている。これは恐らく、天心系統の法術の古い姿を残すものと考えられる。唐・葛・周の三將や、崔・盧・鄧・竇の四將などを重視する。

次に「高上神霄玉枢斬勘五雷大法」などを代表とする神霄系の法術がある。これらでは鄧・辛・張・苟・畢などの雷部の諸天君が中心となる。但し神霄系の法術は様々なバリエーションがあり、八卦洞神雷法の系統では龐・劉・

陶の諸天君を、南宮火府の系統では呉・宋・劉・楊元帥を、太乙雷法系統では丘・王・孔・林・謝などの諸元帥を、金火天丁系統では張天君を重んじるなど、単純ではない。一方で九州社令系統のように、幾つかの諸天君を組み合わせる場合も多い。

また酆都系統や地祇系統では、温・関・張・趙などの諸元帥を重視する。馬靈官や王靈官、また殷元帥などもこれに近いが、やや別の系統にあると思われる。これらの元帥はどちらかというとき冥界の「鬼官」といった印象が強い。関羽や張巡など、忠義を尽くして陣亡した実在の人物が多いのも、これらの法術の元帥神の特色である。

『道法会元』の前半の多くを占める清微系統の法術では、恐らくこれらの出自を異にする天君や元帥を可能な限り取り込もうとしているようである。また清微派においては、これらの元帥神を、伝統的な三清や四御の神と並べることによって、より伝統的な枠組みへの体系化を図ろうとしているようだ。

そして『法海遺珠』と『道法会元』とを比較した場合、両者は類似の性格を持つものの、ややその編纂の態度の相違が目につく。『法海遺珠』においては、太乙雷法系統や南宮火府系統の雷法が非常に強調されている。また「清微」を冠した法術は一つも見えない。中に見られる神は、丘・王・宋などの古くよりの諸法の元帥がある一方で、温・関・張・趙・殷・鄧・辛・張・苟・畢などの元帥も強い。集大成的な性格を持つ『道法会元』に比べて、『法海遺珠』は特定の法術に偏っている向きがある。

さらに『道法会元』には、古い法術も新しい法術も包含されているが、『法海遺珠』の方の法術は、やや時期が限られるものが多いと推察される。「清微」系の法術名が見えないのは、恐らく流派を異にするというより、清微派が雷法を統合する前に編纂されたことを示すものではないか。その中の元帥神についても、これだけ火府系の神々を重視するのにもかかわらず、王靈官の名が明示されないという特色がある。

さて、これらの元帥神がそもそも何処から流入したかについては、不明な点が多いと言わざるを得ない。むろん、ストリックマン氏や劉枝萬氏、また

ボルツ氏など多くの研究者が指摘しているように、これが民間の巫術の影響を受けたものであることは間違いないであろう。また南宋期においては、職業道士に限られず、一定の教団に属さない者たちが様々な法術を駆使していたことはすでに指摘されているし、またデイビス氏は『夷堅志』などの資料から、この時期の「法師」たちの活動の意義を強調する¹¹³⁾。それにしても、そのすべてが民間信仰や法師たちに由来するものとは考えにくい。白玉蟾が『海瓊白真人語録』の中で言うような「神将を増やした」などという行為を行っているのは、恐らく道士階層に属する者たちであると思われる。

例えば酆都系の法術であるが、その元となるのは民間の巫系の呪術であったと思われる。ただそこで主法として強調されるのは張天師の張虚靖である。これは民間の術者たちが権威付けのために張虚靖の名を使った可能性が高い。しかし、南宋末期にその伝授に関わった者たちの多くは道士階層に属していたと考えられる。

さらに民間出自と言っても、様々な影響関係があると思われる。例えば関元帥の形象であるが、『道法会元』などに書かれるその姿は、先に見た通り「重棗色面、鳳眼、三牙鬚、髯一尺八寸」「大刀を持ち、赤兔馬に乗る」というものであった。しかし史書である『三国志』には関羽のこのような形象は見えない。この形象は、むしろ民間の語り物のテキストである『三国志平話』や、幾つかの三国雑劇などの姿に近い。これは明らかに、民間の通俗文芸の影響を受けたものであると考えられる。太歳殷元帥については、これも語り物のテキストである『武王伐紂平話』に同じような姿で登場する。恐らく他の元帥神にしても同様であろう。元帥神の多くが「狼牙棒」や「鉄鞭」などを手にするのは、民間の語り物に出てくる武将の姿を模したものであると推察される。

また趙元帥にしても、『道法会元』の「正一龍虎玄壇金輪執法如意秘法」ではまるで財神としての役割をそのまま担っている。驅邪の法が中心である『道法会元』の中ではこの部分はかなり違和感がある。これも民間における趙元帥の形象をそのまま反映したものであろう。

ただそれにしても、儀礼文書の中に見える元帥については、恐らく『道法

会元』や『法海遺珠』、さらに『無上黄籙大齋立成儀』に見られるような体系が、元から明の時期には確立していたものと考えられる。『三教搜神大全』或いはその基づいた類書の元帥神の記事は、そのような体系に依拠して書かれたものであろう。

注

- 1) 『道法会元』（『正統道蔵』正一部S. N. 1220）
- 2) 松本浩一「宋代の雷法」（『社会文化史学』17号・1979年）45頁。
- 3) 劉枝萬『台湾の道教と民間信仰』（風響社・1994年）68～69頁。
- 4) ミシェール・ストリックマン、安倍道子訳「宋代の雷儀——神霄運動と道家南宗についての略説——」（『東方宗教』第46号・1975年）21頁。
- 5) 前掲ストリックマン「宋代の雷儀」23頁。
- 6) 卿希泰主編『中国道教史』第三卷（四川人民出版社・1993年）105頁。
- 7) 張宇初『道門十規』（『正統道蔵』正一部S. N. 1232）
- 8) 張繼先『明真破妄章頌』（『正統道蔵』洞神部S. N. 979）
- 9) 原文：万法本来帰一処、何分正一与清微。
- 10) これについては、李豊楙『許遜与薩守堅——鄧志謨道教小説研究——』（台湾学生書局・1997年）の192～196頁を参照、また拙論「天師張虚靖のイメージについて」（『東洋大学中国学会会報』第7号・2000年）においても論じた。
- 11) 『一百二十回的水滸』（商務印書館）886頁。
- 12) 原文：話説當下羅真人道、弟子、你往日学的法術却与高廉一般。吾今伝授与汝五雷天心正法、依此而行。
- 13) 拙論「蘇州玄妙觀の十二天君像について」（『東洋大学中国哲学文学科紀要』第12号・2004年）147～158頁参照。
- 14) 『無上九霄玉清大梵紫微玄都雷霆玉經』（『正統道蔵』洞真部S. N. 15）。
- 15) 原文：北極紫微大帝統臨三界、掌握五雷。天蓬君、天猷君、翊聖君、玄武君分司領治。天罡神、河魁神是為召雷檄霆之司。九天流金火鈴大將軍、天丁力士、六丁玉女、六甲將軍、是為節度雷霆使。九天嘯命風雷使者、雷令使者、火令大仙火伯、風令火令風伯、四目皓翁、蒼牙霹靂大仙是為撰轄雷霆之神。火伯風霆君、風火元明君、雷光元聖君、雨師丈人仙君、是為雷霆風雨之主。中有三五邵陽雷公火車鉄面之神、中有負風猛吏銀牙耀日欵火律令大神。狼牙猛吏大判官、五雷飛捷使者、五方雷公將

軍、八方雲雷大将、五方蛮雷使者、三界蛮雷使者、九社蛮雷使者、実司其令、用賛其權。

- 16) 『高上神霄玉清真王紫書大法』（『正統道藏』正一部S. N. 1219）
- 17) 前掲『道藏提要』961頁。
- 18) 『九天応元雷声普化天尊玉枢宝経』（『正統道藏』洞真部S. N. 16）
- 19) 『太上説朝天謝雷真経』（『正統道藏』洞真部S. N. 17）
- 20) 李遠国『神霄雷法』（四川人民出版社・2003年）10～15頁。
- 21) 陶弘景編『真誥』（『正統道藏』太玄部S. N. 1016）
- 22) 原文：世人有知鄭都六天宮門名、則百鬼不敢爲害。欲臥時、常先向北、祝之三過、微其音也。祝曰、吾是太上弟子、下統六天。六天之宮、是吾所部、不但所部、乃太上之所主。吾知六天門名、是故長生、敢有犯者、太上斬汝形。（略）此所謂北帝之神祝、煞鬼之良法。鬼三被此法、皆自死矣。
- 23) 前掲劉枝萬『台湾の道教と民間信仰』93頁。
- 24) 前掲劉枝萬『台湾の道教と民間信仰』99頁。
- 25) エドワード・デイビス「The Cult of Black Killer」（Edward L. Davis『*Society and the Supernatural in Song China*』University of Hawaii Press・2001年）67～86頁。
なお黒煞神に関しては、これまでの拙論では多くの場合これと保生天尊趙玄朗の混同を行ってきたが、これは誤りであった。この点については改訂の機会があれば訂正を加えたい。
- 26) これについては拙論「玄天上帝の変容——数種の經典間の相互関係をめぐって——」（『東方宗教』第91号・1998年）を参照。
- 27) 王光徳・楊立志『武当道教史略』（華文出版社・1993年）41～43頁。
- 28) 唐代劍『宋代道教管理制度研究』（綫装書局・2003年）82～83頁。
- 29) 『元始天尊説北方真武妙経』（『正統道藏』洞真部S. N. 27）
- 30) 『太上元始天尊説北帝伏魔神呪妙経』（『正統道藏』正一部S. N. 1412）
- 31) 無名氏『二郎神鎖齊天大聖』（『孤本元明雜劇』第十冊・台湾商務印書館・1977年）。
- 32) 原文：驅邪院主云、（略）父乃浄楽国王、母乃善勝夫人。腹孕一十四月、則太上八十二化、産母左脅降生。（略）玉帝見貧道有功、勅封九天採訪遊奕使・北極鎮天真武玉虚師相玄天元聖仁威上帝、正授北極驅邪院都教主。
- 33) 原文：祖師九天尚父五方都総管北極左垣上将都統大元帥天蓬真君、姓卞名莊。三頭六手、執斧、索、弓箭、劍、戟六物。黒衣玄冠、領兵三十万衆、即北斗破軍星化身也。又為金眉老君後身。（略）三十万兵、三十六大天将。
- 34) 前掲『絵図三教源流搜神大全』221頁。

- 35) 前掲『絵図三教源流搜神大全』233頁。
- 36) 松本浩一「道教呪術「天心法」の起源と性格:特に「雷法」との比較を通じて」(『図書館情報大学研究報告』20巻2号・2001年)29頁。
- 37) ロバート・ハイムズ「The Rise of the Hua-kai Cult」(Robert Hymes『*Way and Byway*』University of California Press・2002年)76~113頁。
- 38) 元妙宗編『太上助国救民総真秘要』(『正統道蔵』正一部S. N. 1227)
- 39) 鄧有功編『上清天心正法』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 566)
- 40) 『上清北極天心正法』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 567)
- 41) 路時中編『無上玄元三天玉堂大法』(『正統道蔵』洞真部S. N. 220)
- 42) 前掲『道蔵提要』968~969頁。また元妙宗については同書1195頁参照。
- 43) 原文:上帝奏請畢、即詣天枢院部領四天王、十二大神、八金剛、六丁六甲、天蓬、天猷元帥、火鈴大將軍、五雷風雨神、出天門。
- 44) 前掲『道蔵提要』157~158頁。
- 45) 前掲『道蔵提要』1247頁。
- 46) 『上清天枢院回車畢道正法』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 549)
- 47) 『許真君受鍊形神上清畢道法要節文』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 550)
- 48) 『天枢院都司須知令』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 551)
- 49) 『靈宝淨明天枢都司法院須知法文』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 553)
- 50) 『靈宝淨明黄素書積義秘訣』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 556)
- 51) 『太上靈宝淨明入道品』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 557)
- 52) 『靈宝淨明院真師密誥』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 558)
- 53) 『太上靈宝淨明法印式』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 559)
- 54) 『靈宝淨明大法万道玉章秘訣』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 560)
- 55) 『太上靈宝淨明秘法篇』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 561)
- 56) 『靈宝淨明新修九老神印伏魔秘法』(『正統道蔵』洞玄部S. N. 562)
- 57) 黄小石「淨明道神系的演變及其構成」(『淨明道研究』巴蜀書社・1999年)68~79頁。
なお六真とは、淨明天尊太陽上帝・淨明黄素天尊太陰元君・經師仙王誥母・經師御史吳猛・度師真君許遜・監度師張蘊を指す。
- 58) 姚福均『鑄鼎余聞』(前掲『中国民間信仰資料彙編第一輯』)18頁。
- 59) 原文:国朝陸鳳藻小知録云、三天門下泰元都省、張天師居之。天枢省、許真君居之。天機省、葛仙翁居之。
- 60) 王契真編『上清靈宝大法』(『正統道蔵』正一部S. N. 1221)
- 61) 金允中編『上清靈宝大法』(『正統道蔵』正一部S. N. 1223)

- 62) 丸山宏「金允中の道教儀礼学について」(『道教文化への展望』平河出版社・1994年) 50～79頁。
- 63) 林靈真編『靈宝領教濟度金書』(『正統道藏』洞玄部S. N. 465)
- 64) 前掲『道藏提要』346～348頁。
- 65) 『無上黄籙大齋立成儀』(『正統道藏』洞玄部S. N. 508)
- 66) 前掲『道藏提要』371～373頁。
- 67) 『海瓊白真人語録』(『正統道藏』正一部S. N. 1307)。なお、白玉蟾と諸派の関わりについては、横手裕「白玉蟾と南宋江南道教」(『東方学報』京都第68冊・1996年) 123～172頁において詳しい考察がなされている。
- 68) 原文：真師曰、北極驅邪院本只有崔盧鄧竇四将、今却増四名。梅仙考召院本只有潘耿盧查四将、今亦増四名、皆後人所増。即非本法所有。
- 69) 原文：真師曰、古法官、有用黄劉二将者、又高丁二将者、復有用焦曾二将者、用桑何二将、許謝二将者。在其所受於師、用無不靈驗。
- 70) 原文：真師曰、古無酆都法。唐末有大円呉先生始伝此法於世、以考召鬼神。其法中只有法有八将三符四呪法、及有酆都総録院印。後人増益、不勝繁絮似此之類、安有正法。
- 71) 原文：真師曰、法中明言北極驅邪院、蓋云天機院。是故南極有天枢院、如天上左有天枢省、右有天機省。縁天機是北極之内院、驅邪院則外院也。彼天枢亦南極之内院而南極又有進奏院在外。
- 72) 前掲『一百二十回の水滸』886頁。
- 73) 原文：祖師曰、予習聞之旧矣。漢陸賈、為玉清元始法師総仙上真領黄籙院事、又辛漢臣、今為雷霆都司狼牙猛吏。晋陶弘景、今為蓬萊都水司監。唐褚遂良、今為五雷使者。顔真卿、今為北極驅邪院左判官。李陽冰、今為北極驅邪院右判官。李白、今為東華上清監清逸真人。白樂天、今為蓬萊長仙主。又如晋女仙魏華存、今為紫虚元君領秩仙公。唐女仙謝自然、今為東極真人。
- 74) 原文：三帥者、鄧辛張是也。心為鄧帥、肝為辛帥、脾為使者。意識則使者至肝、怒則辛帥臨心。火奮則欸火降。此三帥化形也。
- 75) 『清微仙譜』(『正統道藏』洞真部S. N. 171)
- 76) 前掲『中国道教史』第三卷139頁参照。
- 77) 『清微元降大法』(『正統道藏』洞真部S. N. 223)
- 78) 『清微神契秘法』(『正統道藏』洞真部S. N. 222)
- 79) 前掲『道藏提要』159～160頁。
- 80) 前掲『道藏提要』961～962頁。また、以下『道法会元』に所収の法術の系統など

- については、胡孚琛主編『中華道教大辞典』（中国社会科学出版社・1995年）の619～630頁を適宜参照しており、さらにまた、ジュディ・ボルツ「Revelation and Ritual」（Judith M. Boltz『*A Survey of Taoist Literature: Tenth to Seventeenth Centuries*』University of California Inst of East・1987年）23～51頁からの示唆も多い。
- 81) 前掲李遠国『神霄雷法』264～267頁。
- 82) 前掲ストリックマン「宋代の雷儀」20頁、また前掲李遠国『神霄雷法』96頁。
- 83) 前掲李遠国『神霄雷法』94～95頁。
- 84) 前掲李遠国『神霄雷法』102～103頁。
- 85) これについては、拙論「張虚靖と酆都地祇法」（『関西大学文学論集』第54巻3号・2005年）217～230頁において考察した。
- 86) 原文：地祇一司之法、実起教於虚靖天師、次顕化於天宝洞主王宗敬真官、青城吳道顕真官、青州柳伯奇仙官、果州威恵鐘明真人、相繼而為宗師。其後如江浙閩蜀湖広嗣法者、何限姓名昭福寧幾人。其書始則有石碑本、繼則有鉄林府地祇、原公夫人廟地祇、五雷地祇、五虎地祇、索子地祇、十字地祇、四凶地祇、聖府地祇。後則有蘇道濟派、温州正派、李蓬頭派、過曜卿派、玄靈統派。如此等類、数之不尽千蹊万径、源析支分。
- 87) これについては、前掲横手裕「白玉蟾と南宋江南道教」150～151頁の記述を参照。
- 88) 前掲李遠国『神霄雷法』100～101頁。
- 89) 前掲李遠国『神霄雷法』94～95頁。また前掲李豊楸『許遜与薩守堅——鄧志謨道教小説研究——』190頁、及び前掲『中国道教史』第三卷117頁参照。
- 90) 前掲李遠国『神霄雷法』116～117頁。
- 91) 前掲李遠国『神霄雷法』102～103頁。
- 92) 前掲李遠国『神霄雷法』93～94頁。
- 93) 前掲李遠国『神霄雷法』117～118頁。
- 94) 前掲『中国道教史』第三卷137頁。
- 95) 前掲『中国道教史』第三卷141頁。また前掲李遠国『神霄雷法』99～100頁。
- 96) 前掲李遠国『神霄雷法』95～96頁。
- 97) 前掲李遠国『神霄雷法』96頁。また前掲ボルツ『*A Survey of Taoist Literature*』30頁。ボルツはこれを林靈素の文とみなす。
- 98) 張雨については、前掲『中国道教史』第三卷330頁参照。
- 99) 斗母と摩利支天の共通点については、馬書田『中国道教諸神』（団結出版社・1996年）68～70頁参照。

- 100) 前掲李遠国『神霄雷法』96～97頁。
- 101) 前掲『中国道教史』第三卷142頁。
- 102) 前掲李遠国『神霄雷法』97～98頁。またポール・カツツ（康豹Paul R. Katz）「道教与地方信仰：以温元帥為個例」（『台湾宗教研究通訊』蘭台出版社第四期・2002年）10～20頁参照。
- 103) 劉大彬『茅山志』（『正統道藏』洞真部S. N. 304）
- 104) 前掲李遠国『神霄雷法』96～97頁。
- 105) 『法海遺珠』（『正統道藏』太平部S. N. 1166）
- 106) 前掲『道藏提要』921～922頁。
- 107) 『太乙火府奏告祈祷儀』（『正統道藏』洞真部S. N. 217）
- 108) 『清微玄枢奏告儀』（『正統道藏』洞真部S. N. 218）
- 109) 『鄧天君玄靈八門応報内旨』（『正統道藏』正一部S. N. 1266）
- 110) 『地祇上将温太保伝』（『正統道藏』洞神部S. N. 780）
- 111) 『貫斗忠孝五雷武侯秘法』（『正統道藏』洞玄部S. N. 585）
- 112) 『靈宝玉鑑』（『正統道藏』洞玄部S. N. 547）
- 113) 前掲『中国道教史』第三卷141頁。また前掲デイビス『*Society and the Supernatural in Song China*』45～66頁。